WASON
Per
L104
J74+

Feb. 189
no. 459

明治三十一年二月十日

# 女學雜誌

第四百五十九號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

（……を口繪として挿入
すべき筈の處製版の義發行の間に合はずよりて次號を期し申候也）

# 第四百五十九號目次


◎社說
庭前の花園

◎家庭
海舟先生談話
家政經濟に關して
子供の日記
某小學校生徒の正月日記
小倉織の事◎幼兒との問答

◎講義
園藝その春のころ　小農夫
（種苗の撰び方◎期節の注意◎挿木◎接木移植◎播種◎養鷄）

◎史談
源平二氏（二）　おうそむ

◎文藝
水禽何處にか去る（英詩評釋）

◎隨感
紀念日◎一雨万水◎無責俊傑事務を誤る

◎雜錄
怪賊靜馬の話（上）　八木文卿述
故小此木秀野の絕筆小說
哀別離苦の圖（口繪說明）

◎兒籃
ぶしやう者

◎時文
南征史◎はし句

◎片々◎時報


## 社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す
◎十日發行の分は稍や簡易實際を專にし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾儕多年の主義を發表するもの。
◎單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるるものあらば其望に應ずべし

### 女學雜誌定價表

| | | |
|---|---|---|
| 前金 | 壹冊 價 金拾錢<br>半年 前金 金壹圓拾錢<br>一年 前金 金貳圓<br>（內國無郵稅）<br>代金は凡て前金の事◎前金切れの節は封皮の捺印に御注意の上早速御送金有るべし◎後金は定價通の事 | |
| 廣告料 | 一行 一回（廿七字詰）前金拾錢<br>同 三回以上 一割引<br>同 六回以上 二割引 | |
| 送金 | 爲替は東京本郷駒込郵便支局に宛て小爲替にすべし（郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ふべし | |


明治廿七年二月十九日內務省許可
明治三十一年二月八日印刷
明治三十一年二月十日發行
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚六百六十番地
發行兼編輯者　巖本善治
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十六番地
印刷者　島保藏
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場（電話本局十九番）



## 社告

櫻井成明譯　**緋立比物語**　正價金二十八錢　郵稅金六錢
横山雅男著　**婚姻論**　正價金十二錢　郵稅金四錢
阿波鳴門左衞門作　戲曲　**桂吾郎**　正價金十錢　郵稅金二錢
若松賤子英文集　**巖本嘉志子**　正價金六十錢　郵稅金六錢
布川靜淵、故小此木秀野合著　**俳諧史傳**　正價金二十七錢　郵稅金四錢
故鈴木弘恭述　**百人一首講義**　正價金二十八錢　郵稅金四錢
同　**文法口授**　正價金十二錢　郵稅金二錢


●前號（一月二十五日發行第四百五十八號）要目
第二維新の氣慨◎女學生の洋行◎地方基督教主義女學校の危機◎米國留學記◎臺灣島民子弟の智識◎臺灣土人紳士の品行◎女生の日馬關の明暗◎課躰嵩を論ず◎レディ、コダイヴァ◎故鄉のそら◎譚海


Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 統計集誌

毎月一回發兌
定價金貳拾五錢

第百九十九號目次（一月廿五日發兌）

| | |
|---|---|
| 歐米各國ニ於ケル統計協會及エンゲル氏ノ統計協會綱畧案ヲ記述シ併セテ我ガ東京統計協會統計學社ノ兩協會ニ望ム | 花房直三郎 |
| 統計の發達を圖らざる可からず | 相原重政 |
| 維也納府萬國公會議決　市町村統計調査綱目 | 高橋二郎 |
| 明治三十年本邦統計史略 | 横山雅男 |
| 全國人口（明治二十九年十二月三十一日調） | 足立公忠 |
| 帝國森林原野統計（接前號） | 白浦漁夫 |
| 明治廿九年東京府下盗難金額ト米相場トノ對照 | 横山雅男 |
| 明治卅年　輸出入物品元價月別 | 關三吉郎 |
| 明治卅年　輸出入金銀貨及地金月別 | 關三吉郎 |
| 明治卅年　海關税月別 | 關三吉郎 |
| 明治卅年　外國貿易出入船舶月別 | 關三吉郎 |
| 横濱港輸出入（明治三十年十一月） | 横濱税關 |
| 郵便貯金預入員金高別幷預入金額（明治三十年三月末日現在） | 武市翁壽 |
| 生命保險會社（明治二十九年十二月三十一日） | 鈴木敬治 |
| 各國富力概算（明治二十八年） | 伊東祐轂 |

雜記……◎東京統計協會常議員會●東京統計協會總會●高橋教授統計教育の統計●寄贈書目●日本帝國民籍戸口●列國負債比較●計正誤●明治三十一年七曜日表

發行所　東京市京橋區山城町六番地　東京統計協會



# 花の園生

毎月二回發行○定價一册五錢五厘、十二册前金五十八錢、廿四册前金壹圓十錢、外に郵税一册に付五厘つゝ○郵劵代用は五厘劵にて一割増

第八年第三號目次　二月一日發行

| | | |
|---|---|---|
| 論説 | 庭訓者としての母親 | 坪内逍遙 |
| 家庭 | 家庭の周圍（承前）育兒心得草（松山生）、思ひやり等、 | 麻郷學人 |
| 科學 | 水（其二、天然水） | 今川一 |
| 小説 | 看護（下） | 三輪山人 |
| 史傳 | 建國時代の日本（下）元姫子 | 秦敏之 |
| 散録 | 御伽ばなし（其三）文學解一口はなし | 根本成光 秋田耕郊 虻耘兒 |
| 教園 | 魔道（其二、遣門教） | 武宮環 |
| 文藝 | 和歌の手引（其一）うらわか草（樛園）、和歌十三首 | 長連恒 |
| 雜報 | 十數件 | |

◎見本望の者は五厘切手十二枚封入申込あれ◎

發行所　東京本郷區龍岡町　文明社



◎耳科醫院新築に付移轉

診察時間　午前八時ゟ正午まで

本郷區元町一丁目二番地（水道橋外金刀比羅社東隣）

ドクトル　小此木信六郎


Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

『日本宗教』合併 一月發兌第九號要目

社會學社會問題及社會政策之評論

# 社會雜誌

富豪跳梁時代の病弊 社說
工場條例制定論 佐久間貞一
犯罪と教育との關係 小河滋次郎
社會學論 布川静淵
青年學生墮落の由來 山形東根
東京の密賣淫 觀潮菴
ヘンリー、ジョウヂ ガルスト
職工の教育
政黨維持の價幾何ぞ
内地雜居後の宗教及教育
明治三十年に於ける
社會學○勞働問題 貧民問題○犯罪問題
出獄人保護事業 農業界に於ける問題○
社會事業○社會政策等の評論
明治三十年に於ける宗教界
●宗教上、社會上の彙報十數件
宗教論壇●社會論壇

定價一部十錢郵税一錢六冊分六十五錢
一年分壹圓貳十錢（前金に非れば發送せず）

發賣元 東京麹町區下六番町 社會雜誌發賣所



第二十號 二月一日發行

# 進步黨々報

◎每月二回（一日十五日）◎

定價一冊金七錢○三ヶ月分六冊金四十錢○半ヶ年分十二冊金七十八錢○一ヶ年分廿四冊金壹圓五十錢

●●論說●●現内閣の運命を卜す（濱口吉右衞門）明治廿九年度の現計書を讀む（國城末清）●●政務資料●●財政參考表（國債募集償還見込表○國債元利償還額一覽表○各種公債現在高累計比較表○各國經費一人當負担額表○軍事費國債費行政費の割合○陸海軍經費地方區分表）臺灣の區劃面積及人口●●寄書●●當今の經濟策（天野爲之）質疑解難（二節）●●評論●●新内閣に對する嚮背○外五件○新著批評●●經濟事情●●讀財政經濟意見渡邊國武○外九件●●雜錄●●外報●●盲從○外六件○政界寄話○内閣更迭日記○重要なる法令○重要なる任免○時事日記○●●黨報●●時事●●政綱發表○自由黨の

東京市麹町區内幸町一丁目三番地
發行所 進步黨々報局



●切拔通重の要旨

●切拔通信をなすべき概目は農工業商政治法律外交貿易政黨倶樂部教育宗教歷史詩歌運輸交土木通建築鑛業山林美術技藝各人身上に關する事等凡そ諸新聞紙上掲載の件は小說廣告に至るまで其委托に應し精閲遺漏なく勉めて配達を迅速にして以て愛讀者の便益を期す

●切拔手數料大要

●一己身上に止まる通信は一ヶ月金貳拾錢とす●一事業又は一時物に止まる通信は壹ヶ月金參拾錢より金五拾錢まで●一會社又は一團體は全般に通する通信は壹ヶ月金五拾錢より金壹圓まで●前記の事項と雖とも關係の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨機の契約を爲すことあるべし●月數に拘らず件數にて委托せらるものは東京は十件に付金貳拾錢地方は郵税を併せ金參拾五錢とす尤も細事項は總て號外として件數に算入せず●本社切拔通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すべし

東京市京橋區釆女町廿一番地東京通信社附屬
新聞切拔通信部


Digitized by Google  Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百五拾九號

明治三十一年
二月十日發兌

## 社説

# 庭前の花園

古へより眺めに宜しきものを月雪花と云へり。されど、雪は寒く、月はさびしき心地して、花の穩かに美しきに及かず。況んや是れ花は人爲天然の妙なる共和にして月と雪との自からなるに似ず。人の樂しみを托せて理想の姿につくらんものは豈に花にはあらずや。西行法師の月にかこち、雪にながむるは一入の風流なれども、其の花のやさしさに切なる心根こそ最とも目出度けれ。淑女が雅懷を寄するの所詮し花を以て上乘とす。

我邦の佳人古へより花に信切なり。其の濃かなる嗜なみに双美の趣きあり。大和の花こそ仕合せよきものにてありけれ。但だ憾む、其の花に於けるは、單に之を眺むると、折りて之を插はさむとの二つに過ぎず。自から纎手を勞して之が培養に掛念する事に至りては、殆んど無し。花、亦た遺憾なきを得んや。

夫れ、戸々の家庭、數步の閒地なきはあらず。茲に一握の花の種を下し、もしくは數莖の花の根を植ゑ付けんに、抑も何程の手數ぞや。手數もと多からず、況してや、愛は手數の故に生ずるをや。其の双葉をいつくしみ、其若苗を護り、其の虫を去り、其の霜を防ぎ、恥かはしげに綻びんとする蕾のいぢらしきより、滿裝十分の全盛に至る迄、其の折々の用意を凝めて、之を助長せんと、豈に婦德の大快事にはあらずや。

夫れ、花を眺むるは自然の風景なり。折りて插はさむは、家に其の風景を移すなり。二つながら美とす。左れど、手づから之を養ひて之を愛子の成育の如くするの樂しみに至りては、更に妙なり。女たらんもの丶心ばせに於ては、其の愉快同日の比にあらじ。たゞ未だ試みざるによりて、暫らく其の味はひを懷はざるのみ。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

就中、家庭敎育の資料には花をもて最良とす。詩人うたひて之を天然の恩物と云ふ。フレーベルが幼稚園に使ふものは、たゞ之にかたどりたるに過ぎず。何んぞ實際の花の而も己が家門に於て生成するものに及かんや。花の種より双葉、苗より莟、蕾より瓣に至る迄で、日々の學科あり。虫と云ひ蝶と云ひ自づから來たり遊びて、玆に生物學は成就すべし。西洋人の所云る「家に園藝あれば、兒童外に遊ばず」とするもの即はち是れ也。花をつくるは、兒童を造るなり。家庭に二様の愛子競ひて成長すべし。

加之、花圃の培養は、家庭の健康と和樂とを增す。夙朝暎天の曉、早く人を呼び起すものは、花の姿なり。夕ぐれ人相和ぎ、家人はし近く庭前をながめんところ、露の如く水そゝぎ、つくろふ如く葉を拂ひて、培養の觀念を一家の同情に融化せしむるなど、眞に家庭の至樂にあらずや。

西洋人の家居は自づから結構を異にす。窓を開かざれば、庭面をながむるは難し。日本家は然らず。家に居て四方自由に眺むべし、庭園は常に眼中の景にあらずや。日本の主婦たらん人、常に園圃を家庭の内に入れ、其の修飾を女德の領分と心得らるべし。故らに、挿花、生花にのみ屈托して、直ちに庭前の活ける花に手を着せざるは、我國の家庭にふさはしからぬとならずや。

今や春風春水、一時に到り、花木皆な其の時を得なんとす。所云る園圃に春を下すの初めなり。誌上同好の吾が友よ。あだに此機を空過せしめずして、少しく花に切なるの雅懷を伸せ。他日馥郁として卿等が勞に報ゆるの香あらんは必せり。吾人は今年も亦た花に負かんとを惜むなり。

……所謂誠忠派さ唱候人々は是迄屈し居候ものゝ伸候て、只上氣に相成り、先づ一口に申せば、世の中に醉ひ候體橫逆上いたし候模樣にて、口に勤王さへ唱候得ば、忠良のものさ心得、さらば勤王は當時如何に致て手を付候はゞ、勤王に相成候哉、其道筋を問詰候へば、譯も分らぬ事にて、國家の大體さへ、ケ様のものさ明めも不出來、日本の大體はこゝさいふ事も全く存知無之、祭の形勢も不存、諸國の事情も更に辨へ無之、さうして天下の事を盛さうさは、實に目暗蛇を出すにて仕方もない儀に御坐候……

南洲先生書簡の一節

# 海舟先生談話

## 家政經濟に關して

◎徳川の末から、經濟の事にはコリ〳〵して、死ぬる程の思ひを爲たからネ、外の事は出來ないが、經濟の事は、得意だよ。天狗さまだよ。そのかはり、ワシの經濟は大へん長くかゝるよ。

◎何かヱ、お前がたの小作から上がる米は、何俵とつて毎年貯へるのかヱ。ヱヽさうは出來ない。サッキも東北のヤッが來て、米が高くなるつて、こぼすから、どうするのだと聞くと、外國米が安いので、大抵、外國米を食べると言ふのサ。氣のきかない話しヂヤアないか。これ丈け、米の出來る國で、日本の米が食へないと言ふとがあるもの乎。ワシが世話をして居る家で、少し斗り田地を持つてるのサ。二三十町ばかりだがネ。夫れで、毎年五十俵ほどづつ、かこふのだが、夫は面倒なものさ。乾しもよくしなければ成らず、夫でも減るし、鼠が食ふし、大相な損よ。ダカラみンナがうるさがつてネ、あんな舊弊なとがあるものかテッテ、八釜しく言ふだがネ、何ンと言つても己が承知しない、年々さうさせて置くのさ。田地を持てば、小作と云ふものがあらう。サアと言ふ時にやあ、五升づつもやらねば成らんヂヤアないか。皆ンなが不平ばかし言つて居たがネ、近頃はどうだか少し風の工合が變つて來たやうだよ。

◎紳商だの、何のッテ、何んだ、お猿ヂヤアないか。ナニ、紙ッ片をもつて居て威張るかと言ふてやると、皆ンナ嫌がるよ。徳川氏の一門でもネ、黄金をチヤンと、貯へて置かせたものだ。二三千兩は決してどうあつても遣つてはなりません、そのまゝ、いけて置ねば成らんと、ひどく言つてあつたのだがネ。黄金の價が馬鹿に上つたものだから、何時の間にか札に換へて、同じ二三千圓丈けを貯蓄したのサ。そして、いつか聞くとネ、アレは、あゝ仰しやつたけれども、大層黄金の價が出ましたから、紙幣に換へましたら、餘程まうかりましたと言つて得意なのサ。實に始末にならん話しの出來な



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いのサ。さうかェと言つて寻し置いたがネ、實に譯の分らん人だよ。

◎安部川のサキの方に、山林を一とつ持つてるのサ。それも欲しくつて買つたのヂヤアない、ころげこんだのサ。行つて見もしないがネ。夫れで、近所の人に任せつきりで、どうでも善いやうに仕てくれつて放つて置たらネ、もう二十何年と立つから、それは、木が大きくなつたさうだよ。大した山林になつたと言ふとだ。スルト、近所近邊の人が寄つてたかつて大切にしてくれてネ、濫伐でもしやうものなら、それはひどい目にあはせるといふとだ。小さい家を一軒建てヽ置たがネ、皆ンナが大事にしてくれたさうなが、夫は學校にでも用ゐたらよからうと言ふてやつたのサ。ナニ、此の方が山林の處置をアレで學んだのサ。

◎儉約々々と言ふとは、ワシは大嫌ひサ。幕府の末にネ、儉約々々で、夫は八釜しかつたよ。スルト、大奥でネ、毎日、箒が折れる、はたきが折れる、茶碗がこはれる、それは亂暴の事サ。そして一々、役人にわたるのサ。何んでも、いつか、細工物とかをなさると言ふので、役人に注文があると、ヨセ



切れかなにかを買つて上たさうな。スルト、皆ンなが怒つて、生れてから、こんなものは見たとがない、あまり人を馬鹿になさる、こんなものが何になるかと言つて大騒ぎになつて、役人が眞青になつたよ。夫で、ワシの所へ走つて來て、どうしませうと言ふから、ひどく叱つてやつてネ、直に呉服ものやに言ひつけて、紅白の縮緬を十疋ほど持つて來させたのさ。夫をワシが抱へて、大奥へ行つて投げ出したよ。眞にあなた方にはお氣の毒です、木葉役人と云ふものは、仕方がありません。コンナものが何十疋てつてお藏にあるのを知らないのです。アンナ奴は馬鹿ですから、今日からお役をやめさせます、コレカラは私が仕ますから、何でも入用ほど御遠慮なく私に言つて下さい、コンナ縮緬が入りますなら、まだ何反でもありますと言ふとネ、皆ンナ、顔を見合せてネ、コンナ御結搆なものは、もつたいない、コンナに澤山には入りません。又、お役人を御免になさるとは、どうかお止なすつてと、向ふから頼んだよ。夫れからと言ふものは亂暴がピタリと止んで、大相、儉約になつたよ。夫で、時々奥へ行つてネ、アナタ方は、何ンと言ふ、シミツタレなとをなさるのです。

私は御馳走が戴だきたいからと言つて、いつでも私から御催促サ。天祥院さまは、マウ一つの食台で、皆ンナと一處におあがんなすつた。私共でも、仕舞には、同じお部屋で御馳走になつた。スルト、酒でも、三升德利か何かに入れて、あゝ言ふ所へ置いて、少しづゝ出してお用ゐなさるのサ。何んと言ふ、けちくさいとです、三ツ割か何かをお取よせなさいと言つて、外へ出ては私が言ひつけて、持なせるのサ。スルト、どうも、勝さまは氣が大きい〳〵とお附がさう言つてネ、どうも夫では甘くない、やはり三升德利が好いと言ふたよ。お菓子などでも、箱を一々あけて、紙に包んで、天井につるしてをくのサ。アレハ何ですと言ふと、皆ンなが笑つて返辭をしないのサ。さう言う風になつたから、幕府の末から、維新后でも、奥の方で六かしいと言ふとは、少しも無かつたよ。

◎洗足村の別莊かエ。あれは、津田がすゝめるので、行つて見て、ワシは津田のお伴で、津田が旦那よ。何でも二百五十兩か何かで、やすいから、言ひ價で買つて、其まゝ元の持主をいれて、預けてあるのサ。持主も顔が立つしネ、臨時の收入のあるので、大相よろこんで大事にするよ。ちつとも行つて見たとは無いがネ、其后、段々、ぐるりから賣こまれて、今では、大相、大きなものになつたよ。門も何もこしらへないものだから、宮本などが、あれは、あんまり、ひどい、も少し手をお入なすつたらとよく言ふたが、いつの間にか、大へん、好い景色になつて、空氣などは恐ろしく良いさうな。高田が病氣の時、行つて少しばかり居つたら、それは空氣が別だと言つたよ。此間は、宮本が來て、久し振りで、あの別莊を見ましたら、別ものゝやうに成ました、實に恐れ入りましたと言ふたよ。何ンにも手をかけないのだがネ。夫で、此頃では、百合とジヤガタラ芋を余計植させるのサ。百合はまた馬鹿に大きくなるやうだ。それを貯へさせて置くのサ。マサカの時の用に立つからネ。

◎毎日々々、一圓二圓の金を貰ひに來るものはあるが、男にはウソが多いが、女は仲々容易には來ない、余程辛捧するものと見えるよ。暮でも、二十八日九日と云ふ頃まで持きつて其上で來るよ。靜岡で、色々の家の仕方を付ける時にネ、亭主ひとりではいけないからと云つて、いつも細君と二人を



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

よぶのさ。すると、勝は女ずきだからナドと云ふたがネ、細君の前でよく言ひきけて、家の仕方の事を定めて置くと、キット行はれるよ。女と云ふ者は、實に守の固い者だからネ。

◎ナニ　驚ろくとはない、之からが非道いので、まだ之は初めだと云ふとイ。大隈さんでも、伊藤さんでも誰でも好いがたゞ彌よ食へなくなると言ふと丈けは明らかだよ。

◎お前の子供等はどうするエ、學校へ遣るかエ、それで何如だエ、立派なものになるかエ。……それ御覧な。學校でエラソウな理屈ばかしを覺えて、口は大そう達者になつて、おやぢをやりこめるよ。文明々々と言つて、直きにエライものになつて仕舞ふ、とても己も敵はないよ。ダガネ、追々庫の中に蜘蛛の巣が張つて、遠からず身代をつぶして仕舞よ。その工合ひを大きくして考へて御覧な。一國もまた其の通りになつて、理屈ばかし文明がつて夫れで貧乏になつた丈けの事す。何の不思議はないよ。

◎經濟の事は、經濟家には分らないテ。たゞ經濟の一方から見るからネ。人氣と云ふものがあつて、何も「勢ひ」だからネ。さう經濟學の理屈どほりに行くものでないよ。

六

## 子供の日記

かもめ

本誌は曩に、某小學校女生徒の家庭日記なるものを示したるが、爰にまた、同じ生徒等が、正月の休暇中、教師の指圖によりて、日記をしるしたるものあれば、其等の中より、取出でて、掲ぐる處あらんとするに就きて、先づ、子供の日記てふ事につきて、聊か考ふる處のものをいはん。

それは外の事にてもなく、即ち、子供をして、日記を付けしむるは、一の良き教授法なりといふとなり。既に多少文字を習ひ得たる時は、これに一冊の帳面を與へて、其子供等が、日々の坐作進退往來などの出來事または聞き得たる談の筋のあらましを記留むるとを教へ、父母また兄姉は、之を檢閲して、事の落ちたるを補ひ、文字のあやまりを正し、文章の不明なるを程よくするの、面倒を見てやるべし。而して其日記は、成丈叮嚀に又正直に記入せしむるやうにし、左様にせしむるが爲には、粗末な帳面にはあらで、少しは立派にて、子供の自然惜しゝと思ひて、丁重に取扱ふものなるべし。

これによりて其子供の受くる利益ば、即ち、日々の出來事を回顧して、注意の念を養ひ、また他の訓戒を待たずして、自ら戒むるの道となり、また書物によりて覺えたる文字を活用して、更によく之を智嚢に收め、また有りの儘の事柄を、思ひの儘に記するによりて、作文練習の最良方法となる。

されど一年三百六十余日、毎日〳〵つけ通しにせよと命ぜらるれば、子供も自然飽きを來たすが故、折々一週間か十日位を限りて其間の出來事を日記せしむるに利あり。またこの家庭日記を、學校の教師にも示さば、家庭と學校を聯絡せしむるのよき助けとなるへし。

## 某小學校女生徒の 正月日記

以下に示さんとするものは、即ち前文にいへる、某小學校女生徒が正月休暇中の家庭日記を、摘抜したるものなり。其生徒の年齡または家庭の境遇等につきては、本誌第四百四十九號(三十年九月刊)家庭欄內「某學校女生徒の家庭日記」を參照すべし。

* * * * * * * * * * *

(一)

一日

あさ六時にをきましてより天子さまをさしんへむかひてれいをいたしました

二日

あさわ六時よりつるかめのかきぞめをしました

三日

あさをきましてはねをつきましたよるわをんきやくさまとみなさまとすごろくをしてあそびました

(二)

一日私はきようはてんじんさまいつてまありをつき又ばんはをさみさんやをたまさんやげんちやんや又私のいもうとやですごろくをし又すごろくにをかしをかけてあそびました又すごろくがしまいになつたらばいろ〳〵のあすびをしました

二日は私のをともだちと一町めがしいいきましていけのなかにかもといふとりがいましたそいから又ちやうちやんと天じん樣へはたくしとまありをついてあそびばんはすごろくをしたり又をともだちとをぼさんごつてをしてあそびました

三日朝をきたらをぞうにをたべたらい丶きものをきかへてをともだちや又じぶんのいもとであそび又ばんになるとみんなではなはせをしてあすんで又いもうとと私がをぼさんごつこ

そしてあそびました

(三)

一日朝朝をもつたことこれから心立をよくきよをぎをたゝしくことばつかへをよく母さんや父さんにしんぱいをかけないよをにしよをとおもひましたそれからしごとだのなんだのいしよけんめいにしよをとをもひました

六時二十五分まいにをきましてかほをあらひましてから母さんと父さんにをはよをございますといゝましたら父さんも母さんもをはよをといひましたそれからすぐとよ川様へ母さんとをまいりに行きました内へかへつて行て父さん只今といゝましたらをかいんなさいといゝましたそれからをめでとうございますとみんなにいゝましてそれからをぞにをたべましたそれからをとそをのんでそれからすぐをこうさんとゆうかみゆいさんにいつてもらつてそれからをゆうに行きて内へかいりましてからきものをきかへましてすぐ昼ごはんをたべましてそれから人とはねをつひてあそびましたそれから内へかへつて内にいたらば赤坂の伯父さんがきましてをさけをだしましてをしやくを致しましたそれから赤坂の伯父がかいりましてからすぐ夜ごはんをたべましたそれからさはいさんの内であすぶからを出なさいなとよびにきましたからはあいといゝましてすぐ行きましてかるたをすこをしましてそれからさはいさん内でにかいにりくぐんの人がどうきよしていましてそのりくぐんのひとがきくちやんみかんをかつてきてちやうだいといゝましたからそこのさはいの叔母さんといしよに行きますと一寸よりみちがありましてそれはをばさんですよそれはやちんのさいそくにいつたんですよそうしたらね七時ごろにいつたのにごめんなさい〳〵といゝましたらへゝといひましたからさはいからきましたといゝましたらよがあけるのはじきですからといゝましたそをしたらをばさんがばかにしているじやありませんかあなた今七時じやありませんかといゝましたそをしたらそんなことはよござんすけれどやちんはいつくれるのですなんだのといゝましてそれからすぐみかんをかいに出でそれから叔母さんとかいりましたそれからにかいへもつていきましたそをしていろ〳〵のはなしをしてもらいましたそれから内へかいつて十時にねました

二日朝かみをとかしてそれからかををふいてそれからきものをきてそれからはねをついてあそびましたそれから又さはいさんの内へ行きまして又にかいの内でいろ〳〵ごちそをになつてそれからよその人がきましてみんなで百にんしをして十二時までしてそれからねました

(四)

一日

なにかいたさうとをもいましたらば今日は一年のはじめのしですからなにもしなくつてもよろしいからけがをしないようにきをつけてをいでなさいといゝましたからなるたけそとへでませんでした

二日

けさはそとをはいてから本をよんだりしましたのちはあすび



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

にできましたまたよるはそつかいにいてきてからはさみせんの
けいこをしました

三日

けさはをきてからそとをはきましてからみせをふきました又
は本をよみました又よるはしうじをしましてからさみせんの
けいこをいたしました

(五)

一日

朝ハ七時頃ニ起母ト姉トガカミヲユウマデヲトヲトヲブイ
ヲトソヲ祝ヒヲゾウニヲタベ衣服ヲキカヘハ子ヲツキニ中山
サンノ方ヘ遊ビニ行ニテンヂンサマデ坂マワリヲナシウチエ
カエツテユウハンヲタベヲゼンヲシマイ茶碗ヲ洗ヒシンブン
ヲヨミアンモヲヤイテタベミカンヲタベ日記カキフシタリ

二日

朝ハ六時半頃起キトコヲシマイハタキヲカケハキダシアンモ
ヲヤキヲゼンヲダシヲゾウニヲタベ七丁目エヲツカエニユキ
カヘンテキテヲシロイヲツケカミヲナゼツケキモノヲキカヘ
牛込ヘゴ子ンシニユキスゴロクヲシテアソビハ子ヲツキゴハ
ンヲタベヲユエハインテカエンテキテヲシロコヲタベ日記ヲ
カキ伏タリ

三日

朝ハ六時半頃起キトコヲシマイアカンボヲヲツカサンガヨヲ
ヲシマウマデヲブイヲゾウニヲタベチヨウズヲツカイヲシロ
イヲツケキモノヲキカイイモヲトヲツレテンヂンサマヘハ子



ヲツキニユキスコシアスンデウチノマヘデヲトコノシトドハ
子ヲツキアカンボヲヲンカサンガヲユエイクマデヲブイ四谷
ヘヲツカヒニユキカエンテスゴロクヲシキモノヲタヽミシン
ブンヲヨミフシタリ

(六)

一日は朝ぞうにを食してから着物を着かへそれから島崎さん
の所へさそひに行きさそつてきて高具さんのところへ二人で
さそひにゆきそれからあそびました夜になつてしまざきさん
の所へおとうとゝふたりであそびにゆきすごろくをしてしま
つてからいろ〳〵の事をしてかへつてきてねてしまいました
……五日は朝は昨日の通りおひるごぜんを食してから六
丁目へおつかへにゆきお玉さんの所へあそびにゆきかへつて
きてから一日からの日記をしてからざしきをはきおぜんだて
をしてからおゆに行それからかへつてきてばんのごぜんをた
べてから先生におかりもうした大かう秀吉の書物をよみ九時
半頃にかたづけてねました

(七)

一月一日しかられましたかみいてをゆにいきましたあそびま
したあかんぼをもりました
二日あそびましたばんにすごろくをしてあそびました
三日あかんぼをもりをしましたゆうかたにはねをついてあそ
びました

(八)

一日朝もちをやきましたあそびましたひるからもあそびまし



Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

二日……それからはねがやねの上へ上つてしまいましたからぱしごをもつていつてのぼろうと思ひましたらしかられました夕がたになりましたから少しばかり店ばんをしましたおつ志ようさんと赤坂までまひりました
四日……すぐにねてしまひましたらばおつかさんがお前はらくだよその子をごらんねるときにはぢぶんのとこぐらひはひくもんだよといわれました
五日朝おきたときにねぼけたもんですから志かられました朝も遊びました……

（九）

一日
げたをしまいつてしかられましたいもうとゝけんかして志かられましたあんまりあすんでしかられましたおかんぼををぶつて内の中にはいつていましたからしかられましたをかさんがよそいいつてたからどびんをかけときました

二日
はやくからきものをきかえましたからしかられましたあんまりこたつにはいりましたからしかられました朝わほんをよみました

三日
あんまりふだんにいゝげたをはきましたからしかられましたあんまりよそであすびましたからしかられました

（十）

一日は朝家内一同あつまり讃美をうたいソレカラ祝禱をして



朝餐をスマセマシタソレカラ私ハ着物ヲキカヱ下女ト二人ニテ友人ノモトニ往キマシタ家ニ歸リマシタひるスギニ弟ト私トデヂンジヨウカイテダシマシタ弟ト私ト下女ト雙六ヲシテ遊びました、夜食ヲ三時ニスマセマシタ三十一日の夜は會堂ニテいのりかいがアリシヨリヲソクマデ起キテイタカラ皆早クふしどにつきマシタ
二日は朝早ク起キマシタ私ト下女トデ朝餐のシタクヲナシ母ハヲソクヲキマシタ私ハ弟ト會堂ニマイリマシタ十一時マデイマシタソレカラ家ニカイリジブンのへやにはイリ一人ニテ婦人新報ヲ見マシタ二十六號ニ親切なる小女とデ、アリマシタ、どいつのアル町ニ一人女子ガアリマシテソノ娘は一日同國ニテ大カンペイシキガアリマシタカラ見ニいかうトヲモイ父母ノユルシヲエテ一人デ見ニユキマシタアチコチシテイマシタガイヒバシヨヲミツケテミテイマシタ又一人の老婆さんガミヤウトヲモツテバシヨヲサガシテヲリマシタヲミテ娘ハキノドクニヲモイソノヲバアサンニジブンノ見テイタトコヲユヅツテミセタトイフコトデアリマスソレカラソノ娘ハミエナクナリマシタカラマゴ〳〵シテイタノヲミテ一人ノ紳士ガツレテイツテミセタトユウコトデアリアリマス私ハコレヲ見テ私モイツカ日本體育會ノ運動會ガアツタトキ私ガケイバヲミテイマシタトコロイヂイさんガキマシタケレドモミルコトガデキヅマゴ〳〵シテヲリマシタケレドモ私ハジブンガミタイ一心デシタカラ人ニミセル心モデヅタヤジブンバカリミテヲリマシタソノウチニヲヂイサンハミエナクナリマシタ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

私ハコノ本ヲミテ私ハアノトキミセテアゲレバヨカツタトチモイマシタミセテアゲタラ此ノ娘ノヤウニ又ダレカニミセテモラハレタカモシレマセンソレデスカラダレデモ人ニハシンセツヲシナケレバナラナイトヲモイマシタ一時カラ朝鮮人ガキテイロ〳〵ナハナシヲシマシタ…………

三日ハ私ガアタマガイタミマシタカラヲソク起キマシタ十時ゴロ弟ト二人デザシキデフザケテ花イケヲシツクリカイシテ水ダラケニシテナルテンノ花ヲヲリ父ニ大ニシカラレマシタカラアヤマリマシタ下女ハアンマリヲフザケナサルカライケナイツテイツタ兄ガヨソイクカライツシヨニヲイデトイヒマシタカラ弟ハコンナ家ニイタツテヲモシロクモナイトテデテ往キマシタ私シカラレテヲモシロクアリマセンカラジブンノヘヤニハイリ勉强ヲシマシタヒルスギニ弟一人カイリマシタ兄サンハアトカラカイリマスツテイヒマシタ弟ガカイリミチデ四ツ谷學校ノマイデおばあさんガボツチヤンドウゾヤツテクダザイツテイツタカラテヲバサンニモラツタお金ヲヤツテキマシタトイヒマシタラ父モ母モタイソヲホメマシタ弟ハイツモコンナニホメラルトイヒンダケレドモトイヒマシタソノウチニ兄モ歸リマシタ夜ニナリ兄ハトモダチノシンルイノ人ダノト青年會館ニ往キマシタウチデハ父ト母ト私ト弟ト下女トデウタカルタヲシテ遊ビマシタ

四日…………

五日ハ朝ガ寒クアリマシタカラ朝カラ炬燵ニ臥テイマシタ母ガソバニキテ私ニコヲイヒマシタダレノ寒イノモヲナシコトユヱヲマイモヨシニテツダツテヤラナケレバイケマセンテイヒマシタカラテツダツテヤリマシタソヲシテアソンデイタラめくらが家ノニハニハイツテキテトヲリニデルノハドコイツタラヨイデシヤウトイヒマシタ弟ハコヽハウチノニハダカラコヽヲデヽシダリノホヲイマスグニヲイデトイヒマシタラアリガトヲゴザイマストイヒヘンニマスグニウラノドブノホヲイユキヲチサヲデシタカラ母見テイテドヲモアブナイヨウダカラヲマイチヨツト手シイテヲヤリトイヒマシタカラ私ハカケテイツテ手ヲシイテヤロヲトヲモイマシタラ手ニシツノヤウナモノガデキテイテキミガワルカツタカラツヱヲモツテツレテイツテヤリマシタラホカノ子供がめくらノ手ヲシクナヅトイヒワライ私ハイヤデシタケレドモ私ハジブンガコノヤウニナツタラドノヤウニコマルダロヲトヲモイ人ノワラウノモカマハヅツレテイツテヤリマシタメクラハ喜ビマシタ私ハ此ノ日ソトニ出ルトヨソノ子ガアノ人ハキタナイアンマノ手ヲシイタナド、イヒマスカラ此日家ニイマシタ夜ニナリ大ク保ノ會堂ニ母ト私トデユキマシタ

六日ハ朝カラ人が來マシタソノ人がハナシヲシマシタソレハソノ人ノシリビトデアリマスガソノシリビトト云ノが娼妓ニ賣ラレタト云フコトデアリマスソノ人ノ家ハビンボヲデモトハ父サンハ大佐デアツテヨククラシタ人デアリマスが今ハ見ルカゲモナキアリサマデシンルイモナク又父ガシニマシテカラハ母ト娘二人デアリマスが姉サンノホヲハワルイ病氣デ手モ足モキカナイト云フコトデアリマスソノ姉サント云ノハ學

問ガヨクデキルト云フコトデアリマスガカワイソウナノハ妹デアリマス妹ガ娼妓ニ賣ラレタノデアリマス母サンハ一日デモナガクソバイヲキタイトヲモイ道具ナドヲ賣ナドシテヲリマシタガナニブンニモクラシキレズシテツイニ娼妓ナドニ賣ッタト云フコトデアリマスソノ娘ハナキナガラ云フニハお母サン私ハ娼妓ニバカリハナリタクハアリマセンガドヲカシテナラナイヤウニハナリマセンカトイヘバ母ハ梅ヤヲマイヨクキヽワケテヲクレヲヘ梅ヤワタシモソンナモノニハシタクハナイケレドネエ梅ヤト云イソコニナキフシタト云フ又姉ハヂヨウブナラト又ナキフシタト云フコトデアリマス私ハナサケナクナリカケダシテヂブンノヘヤニハイリツクエニモタレテナイテヲリマシタソコヲ下女ガトヲリナニヲナイテイラシヤルトイヒマスカラ私ハナニモナイテハイナイヨトイヒマシタラキマリワルソウニ往キマシタソノウチニ人モ歸リマシタ私ハナイタカヲヲシテデルノモイヤデシタカラカヲヲヨクフイテ母ノイルトコエイキマシタ母ナイタカヲヲシテイマシタ母ハ私ニムカイソノ子ナンゾハカワイサウナモノダ父サンノイキテイルトキ心ガケヲヨクシ財産ヲノコシテヲイタラヨカツタロヲニトイヒマシタイツモお父サンガヂヨウブデイツモリツパニクラシテイラルヽトヲモツテゼイタクニクラシタカラソノヨウナアリサマニナツタノダロヲナニシロカワイソヲナモノダト母ガイヒマシタダカラヲマイモコレカラ心ガケヲヨクシナケレバナリマセンテイヒマシタヒルカラ母ト下女トニ婦人新報ヲヨンデキカセマシタ



七日ハ早朝ク起キ下女ト二人デ朝餐のシタクヲナシソレヨリ皆モヲキゴハンヲスマセマシタ十時頃一人ノコヂキガキテ私ハテイシニワカレ今ハ此子ト母トデクラシテオリマスガナニブンコマリマスカラドウカカイノヲアマリデもアルナラ下さイテサモナサケナイソウニ云ヒマスカラ母ハソレハキノドクナコトダト云ヒヲカチンヲヤリマシタラタイサウヨロコンデカイリマシタ私ハマダナニカヤルモノハナイカトヲモイカンガイテアノ子ハアタマニ何ニモカブラナイヤウダカラケイトヲデアンダヅキンヲヤリマシタヒルカラポクシガキテセイシヨノトキアカシヲシテキカセマシタ夜ニナリヲモテノカキヲノ竹ヲトルモノガアリマスカラ弟ガ見マストヲバアサンガタキツケデモトツテイルヤウダト云ヒ竹ヲトツテハイケナイヨト云ヒマストヲバアサンハカクレテシマツタト云ヒマス父ハコレヲキイテコマルカラトルンダロヲカラウチヤツテヲケトイヒマシタ

◎小倉織の事

古へ舊小倉藩主小笠原氏の封を信州より豐前に移さるゝや、舊臣從ふて小倉に來住せしもの少からず。而して信州は古來織物を以て著名なる地なれば、狠擧舊臣の婦女中、製織する者の多かりしが、今を距ること百五六十年前、享保、元文の頃、舊臣某女なるもの、一種の小絲織の袴地織を發明し、之を小倉織さ名けたり。其原料小絲は最純白の生綿より熟練の手工を以て紡き出したるものにして、光澤あり、且充分の染付を施したれば、地質の丈夫なるさ、染色の純良なるさを以て、爾後この織物に從事するもの多く、嘉永天保の頃に至りては、全國到る處に小倉織の名を成したり。此頃此業に從事するもの一万三千戶の多きに達し天保の終り、慶應の初めには小倉藩内一ヶ月の小倉織產出高帶地四万筋、袴地一万三千反此代價十三万兩に上りしさいふ。

谷ちやん、あなたは、ことしお幾くつ?
ワタシはネ、お正月が來たから四つになつたの、そしてネ、もうお正月が行つて仕舞つたから、また三つになつたの。

○

民子さん、(四才の少女)あなたは、誰の子?
おばさんの子。
おばさんは、誰の子?
民子の子。
おとうさんは、誰の子?
ぼつちやんの子。
ぼつちやんは?
おとうさんの子。
それではネ。兎は?
兎は鳥の子。
鳥は?
兎の子。
それではネ、民子さん、齒は?
齒はネ……舌の子。
舌は?
齒の子。

"Come, gentle Spring! ethereal wildness! Come."



講義

# 園藝その春のころ

小農夫

庭前に猫の額ほどなる小餘地にてもあらんには、主婦心を用ゐて、之を畠となし、蔬菜を植ゑ、花木を育て、または鷄を飼ふ事の興味と利益の最も大なればとて、家庭の園藝を奬勵するとは、吾人の常に勉むる處にして、現に本號社説にも其旨を辨じたるが如し。而して今玆に、此春の好時機に當りて新に園藝を試みんとする主婦もあるべければ、其人々の爲めに、之に關する注意の二三を述ぶべし。

◎種苗の撰び方

新に着手する場合は勿論、素人は、蔬菜の種類の珍奇なるものよりも、まづ普通にして、簡易に栽培し得らるゝものを撰ぶべく、また土地に適するものなるや否やを區別すると必要なり。而して種及び苗を得んとする場合には、信用ある種苗販賣所若しくは熟練なる園藝家に就きて求め、同時に培養法



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

其他心得ふべき事柄を聞くべし。たゞ珍らしきものを撰び、或は土地の適不適も考へぬ時には、必す成績不首尾にて失望するものなり。

◎期節の注意

東京にて出版されたる書物雑誌などに、何は何月に蒔く、植ゑるなど書きたるは、いづれも東京地方の風土氣候を標準としたるものなれば、地方の異なるに從つて斟酌を加へずんばあらず。例へば北海道と四國九州とは、農時に凡そ二ヶ月の差もある計り。同じ大豆にても信州の山中にては、やうやく實りかけた時分に、上州地方へ出れば、早や、こなされて、俵の中に收められてある有様なり。移植播種の時候は、其土地々々の定まりに從つて、偏に書物などに依賴すべからず。地方々々の農時の定めは、其人民が先祖代々の經驗によりて最も宜しきに適するやう定めたるものなれば、大方はこれに賴るべきものなり。されどまた自分にも一年なり二年なり、經驗して、我屋敷地の風土氣候に適する時節と種類とを見出すべきなり。

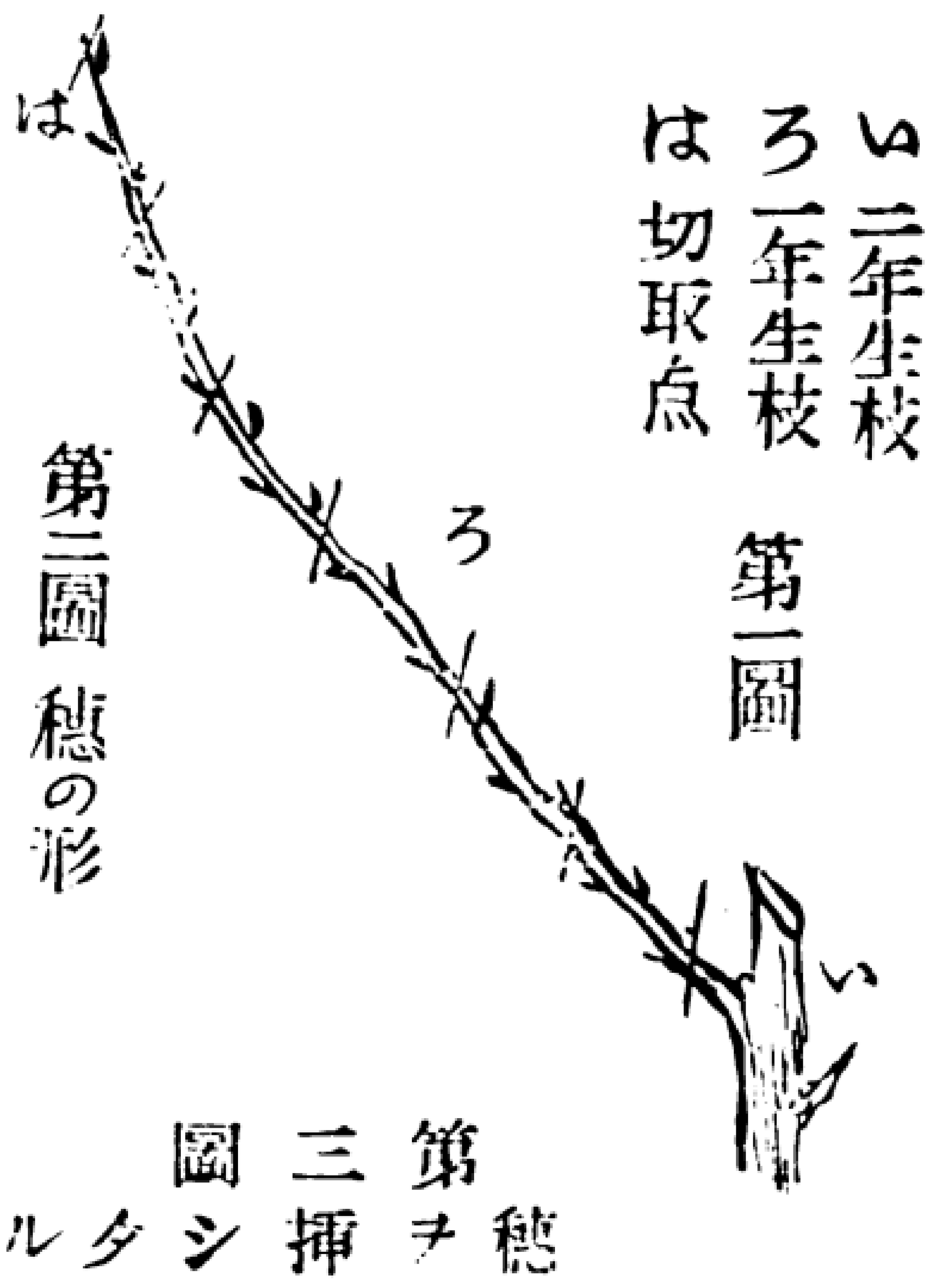
◎三四月の園藝



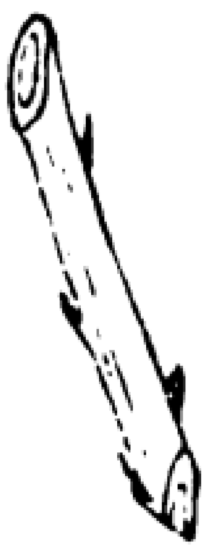
三四及五月は農事に最も適して、農家の最も忙はしき時なり。此時節を外しては、夏季の農産物は、殆ど收穫すべからざるものなり。主婦の小園藝もまた此時を以て最も勉めざるべからず。されば今爰に、培養の容易にして此季節に於ける庭前の園藝に適する數種の果樹、蔬菜類の栽培心得を擧げん。

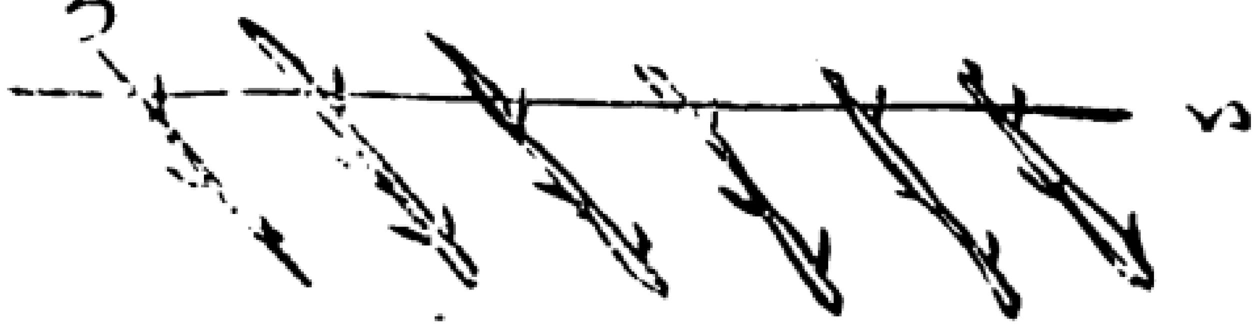
◎挿木すぐり、ふさすぐり、無花果

挿木とは、親木の枝を切取り地に挿して根を生ぜしめ、新しき苗となすものなり。凡そ挿木に用ゐべき穗は、強健なる一年生の枝なるべく、其枝をば第一圖に示すが如くに、芽三つ



第一圖
い二年生枝
ろ一年生枝
は切取点


第二圖 穗の形



第三圖 穗ヲ挿シタル形
い地面
ろ穗

ごとに切り離し、其切りやうは、鋭利なる小刀（傘屋小刀最もよろし。）を以て第二圖に示すが如くに、並行に斜に切り、而して下の方は、刀をかへして、角を斜に少しそぐべし。切り取りたる穂は、第三圖に示すが如くに、いづれも頂上の芽の、土際に空向になるやうに斜に地に挿しこむべし。地ごしらへは、濕氣の多からずして、肥えたる處をよくならして、其上を板にてたゝきつくべし。畦幅及び株の距離は樹の種類によりて多少の差異あり。

葡萄、梅、杏、梨など其他多くの果樹及花樹を挿木にて繁殖せしむれども、素人にも最も出來易きは、すぐり（カーラント）、ふさすぐり（グースベリー）及ひ無花果の三果木なり。無花果は誰人も知る處なれば、別に説明せず。すぐり、ふさすぐりは、共に西洋人の苺に亞いで賞味し、ジャム等に製する小粒の果物なり。近來我國にも漸次に繁殖しつゝあり。

凡そ我國にて春時最も早く葉芽を開序するものは、接骨木なり。之につぐものは、兩すぐりなり。されば接骨木の開序するを機としてすぐりの挿木を行ひ、次いで他の樹木に及ぼすべし。凡そ挿木接木移植共に新芽の出でざる以前に行ひ了らざるべからず。

兩スグリを挿木するには、畠のウチ幅二尺四五寸株の距離五六寸にて一反歩、三万本を挿すの割合なるべく、また無花果ならばウチ幅二尺八寸株の距離八九寸、一反歩八千本乃至一万本を挿すの割合なるべし。いづれも五六十日を經れば根付くもの故、其時分に一回、入梅に一回、土用に一回、肥料を施すべし。地味瘠薄ならば、此外なほ數回も施すべし。肥料は稀薄なる下肥、水肥、下水等なるへし。

◎接木

接木をするに、最も早きものは梅なり、桃、栗、柹等は三月下旬より四月中よろしく、庭木の類は最も遲くして可、六月中までにて可なり。

◎移植、ストローベリー

三四月中移植すべきもの、甚だ多けれども、まづ移植すべきものにて、一寸樂しみ多きは苺（ストローベリー）なるべし。苺には其種類多く、早生、中手、大玉、奥のトックリ（最大）赤三度生、いちご、白三度生いちご、ドクトル、モーレル（大）セチテル、サンジー（大）など好みに從つて撰ぶべく、而して





Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

早生、中手、奥手の三種類共に在るを可とす。苗はウ子幅二尺八寸　株距離一尺二寸位に植付くべし。其苗は種苗店に就いて求むれば一本五厘より一錢までなり。

庭木其他の樹木は三月より初めて四月中に移植すべし。常磐木は少し遲れてもよろし。此時節に遲れなば、秋まで俟ちて移植すへし。

◎播種

播種すべきものは、亦極めて多けれども、まづ普通簡便のものを擧ぐれば、三月頃には西洋三寸にんじん、時なし大根、萵苣、二十日大根、西洋早生いんげん、菾菜、つるな、蕊菜、早生馬鈴薯等なるべし。四月より八十八夜前後まで一切の草花の種を蒔付けてよし。また菜豆類を蒔くべし。その蒔付方、蔓なきものは、普通（ウ子幅二尺八寸、株の距離八寸乃至、一尺を普通の畠作方とす。）なるべく、また蔓あるものは、普通よりもウ子幅やゝ廣く、距離少しく長かるべし。

凡そ種子の小粒なるものは、蒔付たる後、藁などを蔽ひて保護すべく、之に反して、其大粒なるものは、格別の保護を要するを少きものなり。



此外床蒔にして苗を仕立てつるものには、三月頃には、早生蜀黍などよろし。四月以後は瓜類、茄子類の種蒔時なれども、其苗の仕立容易ならねば、素人は五月以後に、商賣人の手より、丈夫なる苗を購ふべし。床蒔は、豫じめ馬糞、若くは枯草の腐れたるなどを積みたる床を用意し置くべし。

◎養鶏

園藝の事を略述したる序に、此春の養鶏行事をも述ぶるの必要あり。然るに此季の養鶏中の大事は雛の孵化にして、それにつきては、昨年四月の本誌（四百三十九號）に述べたれば爰には再説せず。

春さいへばかすみにけりな昨日まで
なみ間に見えしあはぢ島山　　俊惠

さふ人もなき宿なれどくる春は
八重むぐらにもさはらざりけり　　貫之

# 源平二氏（其二）

おうそむ

◎新井白石が、坂東の士大半は門客となるといひ、東國の士源氏に屬するものは頼信頼義父子に服するなりといふたが、源氏の勢を東國に張るの始めは、頼信が鹿島に平忠常を討つて、其功によりて上野常陸介に任ぜられたのにある、當時の朝廷の頼信を此官に任じたるは、其實敬遠主義に出たので、頼信が臣は老いたり遠任に堪へずと口實して、京都に近き丹波に守たらんと願ふたは、王氏を出でゝ未だ遠からざる、我家門の系圖を考へては、どうか朝廷に勢力を得んものとの希望があつたからであらう。朝廷は武人を賤しむるといふ處から、之を許さない。しかし許されなかつて、留任したは、即ち子孫の爲めに覇業の準備をなした譯になつたのだ。

◎義家は前にいへるが如くに、異常の大人物であつたであらう。頼朝以後、源氏の裔にして起るものは、みな八幡太郎の名を讃へ、源氏の軍神は、八幡大菩薩と八幡太郎とを混合したものとなつた。義家が祖父以來に畜へた源氏の潜勢力なるものは、莫大にして、新田、足利をはじめ、德川氏も亦源氏の長者の名を冐して居るのを見て知れる。この潜勢力なるものは、頼朝に至るまでの、源氏の艱難不遇時代にも培養されたに違ひない。

◎頼朝素より、父祖の餘烈を藉らずんば、迚も事業を企つるとは出來なかつたが彼もまた非尋常の英雄であつたので、東國士民の心を得、かつは北條時政、大江廣元、三善康信の如き智謀の臣を有したので成功を奏した。而し此等の條件の外になほ、頼朝が首尾よく覇業を立つるに至らしめた、一大動力がある。其動力は即ち平家一門に集つた、怨恨嫉妬である。

◎清盛が、怨恨を買つたるは、其新政に急いで、且つは平家一門のみに政權を集めたからである。清盛は天子の落胤であつたらうし、それで驕つて、且は俄に出世した。一体武士はこれまで土下坐すべきもので、昇殿さへ許されなかつたに、清盛に至つて、俄に出世をなし、剩さへ、平家ならでば、立身の出來ぬ事となつたので、餘の武人は非常に羨望嫉妬した。自然なる事は、現時の政界にても知れる。藩閥威權を擅にすれば、非藩閥の起るの非藩閥の勢力と、源氏一門の潜勢力とをあつめて起つたのである。

◎而し清盛なるものも、一の大人物であつたに違ひない。中々に智謀のあつたのであるが、たゞ事を成すに急いだ。改革の新政を布くに急にして、或は法皇を幽せんとしたり、或は一人合點で俄に帝都を福原に移したり、あまりに事を成し過ぎた。福原に都を遷したのも、福原は沿海の地、四方と交通の便利を思ふたからの名案とよりは受取れぬが、あまり急なので、朝臣も人民も、皆不平を抱いたので、之を制しきれず、再び還都することになつた。新政なるものは、いつも反對があつて怨みを買ふものであるに、これはまたあまりに急劇なる新政で、時世も見ずに、思ひついた良策は、直に實行するといふ性急者であり、且つ我儘者ゆゑ、反對と怨望とは、大にあつまつた。清盛に何んでも急いで事をしやうとしたのを重盛が居て、其處の處を程よく制し、清盛もまた彼には聽いたのであらう。この智者が居なくなつてからは、奔馬の勢で改革を行つて、天下の怨恨一時に度を増した。福原に都を遷したのも、重盛死後で、彼だにあらば、かくまでに急には行はなかつたらう。重盛の死は、平家の大黑柱を倒したものである。其熊野に死を祈つたといふは、後世の筆を執るものが、皮相を見て誤つたのであらう、重盛としては受取れぬ。而して其疾に瀕するや、天命を知つて固く動かなかつたのは、大に鍛練したる精神があつたからである。史家が此邊の消息を可笑しげに傳へたのは、重盛といふ人物を洞察せぬからである。

◎平家は武門として俄に出世して、武人の目から見れば、非常の驕をなしたものである。それ故驕る平氏とさへいはれて、頼朝も左様にいひて、之を討ち、且つ源家が驕に長ぜんとを非常に謹んだ。義仲、義經の如きも、自分に先だちて昇殿などを許されて、驕つたものだから、憎んだ。其鎌倉に在つて、高官を辭して、武人相當の地位に處したは、驕りを謹んだのである。この計は多分北條氏から出



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

たものであらう。北條九代は、倍臣に甘んじて、官任甚だ卑く、驕りを謹んで、政治を簡易にするを家法とした。この家法は即ち時政、義時等の立てた處で、また頼朝に教へたものであらう。北條氏の政治は凡て事をなすに緩にして時機に投ずるを法とす、これによりて察すれば、時政の如きは、常に頼朝をして、徐に事に當らしめたものであらう。其兵を擧ぐるや、三十四歲、年からいへば、まだ而立の時ではあるが、昔の多くの英雄武將などの早熟から見ると、先づ晩成の方である。伊豆に流されてより二十年、清盛太政大臣となりてより十三年、治承三年八月重盛死して、やうやく時機到來した。これまでに既に頼朝は兵を擧ぐるの氣があつたらば、時政の如きは、常に之を制したのであらう。此時機に達するまでには、たしかにいろ／＼の試みに敵對して、準備の手數に苦心したのである。頼朝の事業には、廣元、康信の在ることを忘るべからずと雖も、第一に時政が、那計り獻策したものなるかを記せねばならぬ。史家はあまりは其事をいはれども、他に知られざる裡に大きに成して居るのである。

◎頼朝の關東に起つたのは、最初から其地の利を占める考もあつたらうが、第一には已が其時の居處であつたからである。而して最初から天下を制しやうとは考へなかつたらう。京都を距ると遠き地にて、威を張りて、平家に拮抗する積であつたかもしれぬ。そして、時世の向ふまゝに、漸次に規模を擴張し權勢を廣げたのである。頼朝は、終始、成丈天子の都の煩さをさけて、關東に根據を固める志を失はなかつた。それ故に一度だに、兵を率ゐて、京師の方に出でなかつた。幸に、平家を倒さんといふ、多くの野心家が、同時に起つたので、之を利用して漸次に彼等の功を、我手に收めた。義仲行家等が、直に平家の根據を衝く時は、成可く傍觀の地位に立つて、其間に關東を統一し、さて平家がいよ／＼西海に落ち延びて、義仲等が、京都に跋扈するとなると、これは己れの爲に第二の競爭者となつたから、法皇の義仲を嫌ふを幸ひに、義經範頼を使はして之を討たせ、もう滅亡に定まつた平家の方は、暫時打棄てゝ置いて、四國九州などの味方の者と勝負を爭はせて置き、いよ／＼義仲も亡んだので、序に平氏を西海の魚腹に葬つて仕舞はした。其間も頼朝自身は、一歩も關東の地を出でずして、鋭意其地の統一に從事した。其後義經が圖に乘つて、京都で勢を得るの傾向があつた故、兼ねて目付に付けて置いた景時の讒言を利用して、罪狀を附して、之を亡ぼして仕舞ひ、次いで範頼も片付け、京都は既に我が權勢の下に全く從つたので、心配はいらず、ゆる／＼鎌倉に居て、天下を制せんが爲めに、關東を固めた。富士川の障以後には、殆ど自分で戰爭をした事はない。それは、敵は凡て關以外に在るので其方は人まかせにして、關東を大事に固めて居たからである。義經の衣川に落延びしや、頼朝は一方では泰衡を嚇し、他方では院宣の名を藉りて、泰衡をして義經を討たしめて置いて、其後に、泰衡の速に勅を奉ぜざるを口實として、奥州に生けておいては、末々まで、目の上の瘤である藤原氏をば、自ら兵を率ゐて征伐した。如斯に、頼朝は、止むを得ない限りは、容易に動かない。何時でも他人を使つては、手柄は收め且又、時世が、凡て頼朝の利方に向つて來て、而して悠然之を利用した。其機略に富める腕前は實にすさまじきものである。

◎頼朝は、其骨肉を殺すこと、前後八人、義廣行家は叔父、範頼義經は弟、義仲と行家の子光家とは從兄弟、義經の子なる姪、義仲の子義高は從子にして女婿であつた。其殘忍酷薄なることは、甚だ非難すべきであるが、これは其猜疑心の故にのみなせしことには非らず。覇業を固定せんとせば、實に止むを得なかつたのである。かやうなるものは、創業の際には、みな手足として使役することは出來るが、守成の時となると、實は厄介ものである。それを知つてゐるから、業の成るに從つて機を見ては、みな亡ぼしたのである、漢の高祖が守成の日に、創業の功將を殺したのと道理は同じである。骨肉の緣はあり、戰功は有る此等のものが、天下既に平いでの後にも、なほ跋扈するやうでは、源氏の天下は、姑澤山で、安んじやうがない。義仲、義經の如きは、みな一通りの武人丈の事で、守成の日には邪魔者に過ぎないのである。源氏三代にして滅んだのは、白石の如きも、頼朝が殘忍の應報であるやうに論じては居るが、勿論、骨肉悉く亡んだは、源氏の生命を短縮したらうが、しかし又兄弟共が生きて居たならば、內亂位は起したらうし、頼朝も六十六國の總追捕使までになることは、あれまでに容易でなかつたらう。

◎骨肉を殺したといふので、罪は深いやうだが、兄弟とはいへど、異腹ではあるし、且つ、四方に離散して育つたものゆゑ、情緣は極めて薄い。されば兄弟といへども血緣の名ばかりであるから、御互の情は淺く、まして他の伯父、從兄弟などいふも他人と撰ぶ處がなかつたであらう。黄瀬川の陣に義經が尋れて來た時は父義朝を見るの思ひがあるといつて、兄弟相對て涕泣したといふは、頼朝の眞實

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の情であらう。其時は成否の程も知れざるに、有力なる方人が現れ來ので、それは喜んだに違ひない。創業の時代には、何人に限らず、力になるものは、皆大切にしたであらう。

◎范蠡が大夫種に言つて、越王勾踐は、其人相は、艱難を共にすべく、安樂を共にすべからざる人だといふて、功成り名遂げしや、自ら船を五湖に泛べて去つた。此處は頼朝も勾踐に似た處があるが、大躰に於ては漢高に似て居る。かれは軍人ではなくて、一大政治家であつた。去かし其性質は、至つて惡い人であつたらう業の成るまで、人心を收攬したも、守成となつて、段々に鎌倉源氏に對する武士の同情が減じて、それで僅に三代にして亡んでも、之を弔ふものはなかつた。

◎義仲は項羽に似たやうである、義經は、あたりまへの武人であつて、守成の業には適しないものであつたらしい、而し性質は正直で、策略は乏しいやうだ。初め頼朝の西征大將を擇ぶ時に、陰に鬮を拈いて、諸弟をして更る〱執らしめたのに、義經ばかり、平氣で之を執つたといふ事、または腰越狀の事などが事實とすれば、兄の胸中を察するとの出來ない、たゞの正直ものらしい。正直ではあつたが、好色なりしと、功成りて多少矜る處のあつたのとが、身を亡ぼすの基となつた。而し正直であるから、佐藤兄弟、鷲尾經春、辯慶の如くに、彼と共に死生を共にするものがあつた。頼朝に至りては、かやうな家來を持つとは出來なかつた。

◎源氏が骨肉を殺ぐに反して、平氏の一族は、僅に頼盛、時忠の二人を除くの外悉く西海に入りて、滅亡を共にしたのは、血肉の情誼頗る美くしい。平家の亡落は、日本歷史中の最大悲劇場である。さりながら、この事柄も、たゞに骨肉の情誼にのみ由るものではない。素より其盛時には、兄弟親戚互に相往來して、情交も深きを致したであらうが、去かし、源氏といふ大勢力は一門の敵である。兄弟墻に鬩げども、外其侮を禦ぐの道理で、必然の勢で、一門は團結して敵に當るとなつたのである。其上獨り立ちの出來るやうな氣慨のあるものは尠かつたから一處に結び付くとなつたのだ。平安の時には離散しても、艱難の時には團結するのが、骨肉自然の情である。それに淸盛のやり方は、頼朝とは違つて、成べく一家の頭數を多くして、堂上の位爵をふさがうとするのであつたから、都落の時には、一門百餘人といふ大勢であつた。



# 文藝

## 水禽何處にか去る　（英詩評釋）

今爰に評釋を試みんとする英詩一篇は、米國詩界の曉星ウイリアム、クーレン、ブライアント (William Cullen Bryant,) が傑作の一抒情詩なり、天地に盈ち滿ちたる大攝理者の大御力を信ずるの靈覺を、空行く一羽の水禽に寄せて、高遠玄妙の理想を歌ふ。詩想由來、一羽の雀も神のゆるしなくんば地に墮つるとなしといへる聖語に基くものならん。

ブライアントは十九世紀に入るの前六年米國マッサチユセッツ州に生れ、天成の詩人なり。十九歳にして死賦の傑作あり此一詩以て、米國の詩界を提げて、天下の重となし、彼國これよりして多くの詩星を生めり。

こゝに此評釋を試むる所以のものは、未に外詩を味ひ玉はざる讀者の爲めに、彼國騒人の幽玄なる詩想の万一を皷吹せんとするにあり。讀む人冀くは其心してよ。

## TO A WATERFOWL.

Wither, midst falling dew,
While glow the heavens with the last steps of day,
Far through their rosy depths, dost thou pursue
Thy solitary way?

露は置き、日影やうやく傾きて、薔薇の色さしはゆる、入相の空、一羽の水禽翔る。汝水禽よ。天空杳々浩渺、測り知るべからず。うらさびしくも汝孤り、何地をさしてか行かんとする。

Vainly the fowlers eye
Might mark thy distant flight to do thee wrong,
As, darkly Paiuted on the crimson sky,
Thy figure floats along.

獵夫、鋭き眼を放ちて、汝が影を追ふへど甲斐なし、其翔るや杳遠、毒矢も及ぶ處に非ず。茜いろなる大空は、さも薔薇に似たりけり。誰が筆なれや、薄墨に描けるごとき汝が影は、ゆくか歸るか、孤りたゞよふ。

Seekst thou the plashy brink
Of weedy lake, or marge of river wide,
Or where the rocking billoa rise and sink,
On the chated ocean side?

なれ水禽の身の、さしてゆくらん方や何處。水草しげき湖水の渚によする漣か、川瀬のくまか、はたまた騒立てる大海原のその岸の、よせてはかへる大波か。

There in a Power whose care
Teaches thy way along that pathless coast,—
The desert and illimitable air,—
Lone wandering, but not lost.

汝が茫々たる大砂原、はた渺々たる天涯の、旅衣たつきもしらぬ路の空に在るや、汝を護ります、大御力の在しまして、行手のまもり恵みあれや、たゞ獨り淋しく彷徨へども曾て失はるゝとなし。

All day thy wings have fanned,
At that far height, the cold, thin atmosphere,
Yet stoop not, weary, to the welcome land,
Though the dark night is near.

大氣稀薄なり、風また寒き大空に、遥に翔る汝水禽。ひねもす、翼を動かせど、かつて疲勞せず。暮はてつる空は、ぬばたまの暗夜も今や近づけど、來よとぞ招くこの陸に、休らはんとて、舞ひ下らんともせず。

And soon that toil shall end;
Soon shalt thou find a summer home, and rest,
And scream among thy fellows; reeds shall bend
Soon o' er thy shelter'd nest.

されどやがて、汝、其翼を收むる時に來り、やがて、夏なれや、休らふべき蔭を求めて、うからやからとむれつどひつゝ、聲樂しげによびかはし、汀の塒、蘆草の被ふにまかせて安けからん。

Thou'rt gone; the abyss of heaven
Hath swollowed up thy form; yet on my heart
Deeply hath sunk the lesson thou hast given,
And shall not soon depart.

吁、今や汝は去りぬ、空濶たる天漢汝を瞰下して、影既に沒せり。されど、我は、汝を天涯に追ふて得たる處靈覺あり。汝既に去るも、我は直に之を失ふとあらじ。

He who from zone to zone,
Guide through the boundless sky thy certain flight,
In the long way that I must tread alone
Will lead my steps aright.

我汝を見て知る。はてよりはてに至るまで、限り知られぬ大空に、汝を導きて、翼の翔り、あやまりなからしむる、その大御神よ、また、人生迢々の世路を踏んで、たゞ獨り長き旅する我てふ人のその爲めに、行手のまをり、をりたまふべければと、知りての今はいとど心安きかな。

契沖

もしほやく難波の浦の八重霞
ひとへはあまのしわざなりけり

初瀬野や里のうなゐにやどとへば
かすめる梅の立ち枝をぞさす



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

# 隨感

## ○紀念日

邊際なき大空に何の痕跡もとゞめで過ぎ行くらん時てふものこそ、一と度び去りて復びは返り來まじき筈と思はるれど、あやにくに年月の名を刻みつけたれば、其日となりて忍ばるるとの多かるぞ切なき。ゆく水に文字を認ためては、一葉船、もとの流れにかこち、船舷の劒のあとを撫しては、舟中の孤客、流水の果敢なきを懷ふ。夫れ往くものの影、次第にうすらぎて、遠く雲煙模糊の姿に混ずれば、肉と靈と、人と神と、相距る殆んど識りがたし、亡き人の紀念こそ、實にも神々しきものにてある哉。つねに翩翻として朝の翼を張り、宇宙八荒を心のまゝに馳けめぐれるが如けれど、さりとても亦た折々は有し昔しをゆかしくや思ふらん。後れたる人々の紀念には、其の神の如き姿こそ貴けれ、後れたる人々の上に臨むときの其の情懷は、依然、むかしの人の如くありたき哉。願はくは、一と度び昔の花顏を見して、其の口もとの緊れるを解き、熱愛卒直の忠言を打あけて、人界の慕へる耳もとに響かせよかし。苦しきは人に記憶と云ふ力のあるとなれど、ゆかしきも亦た此の力あるに由る。魔風たとひ其の姿をかき消し水火幾度び其の塵を滅ぼし、花咲ひ鳥吟じて思ひを何處に轉ばすとも、誠ある人の執念を拭ふべき力あらんや。孤墳、雨にさびしく、白骨、土中に壞れ、弔辭空しく散じ、其名總べて忘らるる時をしも末期とはせんや。惟んみるに、人一個、其の終生を托して敢て疑がはざりし赤情は、何れの日にか酬い盡すを得ん。何の爲めに貧困し、何の爲に病み、何の爲めに死せし。後れたる人にして若し其由因を自己の爲と考へ付くほどの緣あらば、殘生を之に附與し、心操を之に契り、念々同じく伴ひて無限偕老の交はりを續くとも、尙ほあきたらず、之を奈何んぞ斷絕せんや。抑も、佳人の愧恥は男子のに違へり。終身一と度び解くの操をゆるべて、敢て固く一定の丈夫に結ぶ。丈夫たるもの其の貞心を苟且にすべけんや。嗚呼々々、左りとても叉た神々しくなれる人の靈躰を汚すべからず、澄みて白泉の如くなれる其の思ひを煩はすべからず。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

朝に日輪に近く義のエホベを拜し、夕べに紫雲に乘りて天の音樂を奏でつつある人こそ、今は吾等が伴侶にてもあるまじ。其白衣の姿は、臨終の大理石の如き白色よりも尙ほ白く、其の言の葉は、末期の尊き遺言よりも尙ほ氣高かるべし。願くは、今ま來り護りて吾等が歩みを調へ、吾等が思ひを淸めよと祈る。聞きたきは、天界の消息、今しも其の心のさびしきや、にぎはしきや、友のありや、無しや。他日後れたる人の逼ひかけて行ん時、何處に迎へ、何處にて出で合ひ、もしくは同もに在らんとの適ふべきや否や。夫れ、年月不思議に廻り來りて、紀念の火を燃やし、髣髴として其の姿の近づくとをしめすの時こそ、かなたにても亦た回顧の情の增せし時なる乎。逝けりし后に、人の成長せしものあり、事の變化せしとあり、吾思ひの推移せし樣あり、一々、其の既に知れる所なる乎否や。嗚呼、苦しきと、ゆかしきと、樂しきと、悲しきとは、人生、時を定めての紀念日にてこそありけれ。

## ○一雨万水

落ちて万丈の瀧となる水もあり、湛へて千尋の淵となる水もあり。深く地中に竄入し突如として高く迸ばしる水もあり。洋々洪々として平野大原を流るる水もあり。奔龍激蛇のすさまじき勢ひして大海原を騷がす水もあり。落花多情を乘せて迂紆として遲く流るる水もあり。木の葉かくれに白銀の糸を引く斷續の細き水もあり。濁れる水もあり、淸める水もあり。滯ほれる水もあり乾くもあり。快ちよきもあり、汚らはしきもあり。水の千態万樣は遂に名狀しがたきほどなり。而れども、試みに其の出處を考ふれば、惣べて是れ一樣の天雨より下り、万水皆な上に歸して、かの蒼々より出で來らずと云ふとなし。夫れ、世人各樣の異なれる態や、言ひ盡しがたし、而も其の由來を思ふに豈に多岐ならんや。經に曰く、天父、與へざれば我に就るなし、我を遣し、天父もし引ざれば、人よく我に就るなしと。

## ○無言俊傑、時務を識る

客ありて詰りて曰く、何故に時事を論じ、當世の急務を策せざるやと。われ奇しみて曰く、君にして尙ほ當世才人の言を爲す乎。夫れ、時事は秘密なり、要務は機會なり、豈に之を

紙上に論ずべきものならんや。之を論すれは、既に行はる可らず。行はんとして論ずる時は、既に機會を失す。凡そ實際の時務なるものは、豈に帋上先生の容易すく窺ひ知る所ならんや。只だ夫れ帋上に論じて稍や行ひ得べきの事は、彼の多數の賛成を黨援として、以て衆愚の認可を乞はんとする類の事業なるのみ、これ豈に經綸の大事ならんや。苟しくも大勢を決して大事を成す、何すれぞ之を公論するとを容さんや。君の如き亦た淺々たる當世の論士か、乞ふ吾黨をもて其の伍に數ふる勿れ。抑も、新聞帋に要とする所は、事實の報告を第一とす、其の論説の如きも亦た輿論傾向。事實を示めすの用のみ、豈に何れぞ實際に用ゐべきの價値あらんや。雜誌に至つては、更に細密に事實を探究し且つ報告すると、別に、讀者の感操を養ふとを旨とす、何んぞ亦た其の論説の當世に用ゆべきを問はんや。こゝをもて、新聞雜誌の才人、少こしく時務に當りて究せざるは稀なり。其の紙上に論策せし消息の顯然として實際と相違ふに驚ろき、忽ち意氣挫折して、筆鋒の鈍らざるものは少なし、痴態眞に見識に類すと云べし。凡そ、能く行ふものは能く言ふとなし。言とは則はち行ひがたきの故なり。世上今日立黨の論士多し、故に吾人は其の決して能く行はざるとを知る、何んぞ敢て吾黨を淺薄者流に引んとするや。といと大言して少々不平を漏らせば、客輿驚して默しぬ。其の默せしによりて少しは分りしかと思へど、猶ほしやべりしならば、議論となりて遂に雌雄も分らず、黒白も分らざりしなるべし。

晉海魚龍動　盟山草木知

## 雜錄

### 怪賊靜馬の話（上）

八木文卿述

實に怪しからん泥棒もあるものデ、技藝も斯く迄で上手になるものかと、驚ろく許りです。舊藩の時靜馬と言つた因州の浪人がフイと出て來て、どうか藩に用ゐて貰ひたいと願ひ出

たが、色々詮議が纏らんで、段々長く延びた。スルト、或晩、火事があつた所が、ソレハ〳〵静馬がすばらしい働きを仕たので、家中中はもとより、町人等が皆な仰天した。かほどに働きのあるものを、どうか長く藩に置きたいと言ふ人が多かつたが、どうも左様言ふ都合にならなかつたので、静馬も大層困却して、宿屋に滞ふつた拂ひも出來んから、何處かへ暫らく奉公して、この借りを返したいと言ふので、私の親父に頼んだ。夫れで、寺に頼んで寺男に這入らせた所が、直きに住持の氣に入つた。人足や、土方などが、何か八釜しく言ふとなどがある時、静馬が一寸と出て何か言ふと、直きに治まつて仕舞ふと言ふので、住持は大相、喜んで居た。夫れに忍術の達人だと云ふから、私は折々、寺へ行つて、其話を聞いたが、夫は妙な事には、高手小手に捕つた繩を、一寸次の部屋へ這入るかと思ふと、直きに拔いて仕舞ふ。又、雨戸をあける術と云ふは、シッカリ〆めて、錠を卸して、心張をつぱつて置くのを、ちよいと外に出て、之では迚もあけられやしないなどと言ひ乍ら、直に歸つて來る。其の跡へ行つて見ると、少しも音が爲なかつたに、戸が皆ンナ、倒れて開いて



居る。又、千人の足音をさせる術と言ふは、椽側に出て走るかと思ふと、ドタバタと大變な響をさせて、百人二百人の大勢が走るやうな足音をさせる。上下を着て長持の中へ這入るのを、紙で封をして置くに、あけて見れば、上下だけ脱いで、本人は知らぬ間に逃げて居るなど、不思議の事ばかりするから、私は面白くつてならん。段々と話しを聞いて居た。スルト、或日言ふには、あなたは大相御熱心だから、まだ〳〵秘傳の書が澤山あつて夫を因州に置いてありますから、取つて來ませうと言ふて、フイと出たが、三四日たつて、青い顔をして却つて來て、「とう〳〵だめでした、途中で舊藩の人にあつた所が、とても今歸つてもダメダ、お前の道樂した御詮議が嚴しい」と言ひますから、行くのを止めましたと言ふた。何事もなく數日經つと、或日、ドタバタ出入のものが走つて來て、「旦那々々、大變です、あの静馬は大泥棒ださうです」と言ふから、どう云ふ譯だときくと、「此間だ因州に行くと言つて出て行つた時、宿屋に、二三人の合ひ宿になつて、一つ蚊帳の中に寐たさうです。スルト暑い夜の事で、皆なよく眠られないので、ウツラ〳〵話しあかしたと言ふとです。スルト、

翌朝になつて見ると、泥草鞋の足跡が、そこらこゝらに大相ついて居て、宿屋の善い刀の目釘や鍔が無くなり、蚊屋の中に居たもの等の金が無くなつたさうな。そして、靜馬も三兩とか入れてあつた懷中物が無くなつたと言ふので、大方、裏口から知らぬ間に泥棒が這入つたのだらうと言ふとになつた。皆んな不運とあきらめて別れた所が、此夜の合宿の一人が其晩サキの宿について泊ると、御一人、合宿がありますと言ふので、何の氣なしに、這入つてゆくと、夕べ懷中物を取られたと言ふ彼の靜馬が、行燈のあかりで、黄金の目釘を連りにながめて居た。さうして襟のあちらこちらから、一つ二つと取出して居たさうで、夫を見ると、扨こそ、夕べのは、アレが取つたのかと驚ろいて、そのまゝ外に出て亭主にはなし、直きに其筋へ訴へて、急に捕へたのださうな。夫れから、嚴重に縛つて、駕に乘せて連れてゆく途中で、役人等が辨當を食ふ間だ、駕をそこに置き、歸つて來ると、フィト駕があがつた。中を見ると、もう空になつて、何處へ行つたか分らない。實に恐ろしい泥棒だと舌を卷いて話して居たが、今日また其の合宿をした人がフト寺へ來て見ると、例の靜馬が居



ると言ふので、ビツクリして、今までそつと話しました」と言ふとなんです。夫で、私もびつくりして、親父と一處に、寺へかけつけて行つた。そして、あの證人になる旅人もつれて行つた。靜馬が何に食はぬ顔で居るから、あの旅人が、お前は太い奴ダ、此間は、よくも逃れて、まだコヽに大膽にブラ〳〵して居るかと言ふと、靜馬は大變に怒つた。何を不屆なとを言ふと言つて、取つても付かん工合だか何んだか眞に變だ。旅人も固より屈せず、何を今になつて言ふか、夫では出す處へ出ヱと言つて引張らうとすると、靜馬は大きに怒つて、最う容赦は出來ん、そこに待つて居ろ、其まゝには置かんゾと言つて、自分が平生部屋にして居る二階へバタ〳〵と走つて上つた。其の劍幕と言ふものは、刀を取つて、飛で下りて來るやうな勢ひであつた。然るに、イクラ待つても下りて來ないから、之は變だと言つて、皆ンなで二階へ上つて見ると、四方どこへも通じない二階で、ぐるりは壁であるのに、靜馬は自分の荷物をもつて、はやどこかへ行つたものと見え、荷物と、靜馬とが見えなくなつた。

故小此木秀野君の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

故小此木秀野君の

# 絶筆小説

社友小此木秀野君、一月十四日を以て、遽焉、郷里に易簀す、享年二十七。君は天賦の英才、夙に文名を成せり。而して君の女學雑誌に於ける、縁故極めて淺からず。此良友の訃音達するや、同人皆深く之を痛む。以下載する處の小説は、昨臘の稿に係り、既に成りて、未だ名を題せざるに、圖らざりき、これ實に同君が此種文字に於けるの絶筆となり了はんぬ。爰に同君の令弟は、此稿を以て我社に寄せらる、故に今これを掲載して、讀者諸氏と共に、永く秀野君の芳名を紀念するの便りとせん。　記者識

成瀬家の世統の一子健治が、今年彌生の花の頃、十五歳の蕾のまゝに、無情や、冷やかなる浮世の風にえ堪へで、端なくも、黄泉に旅だちけるよりは、春の朝の袂露けく、わが叔父母の愁嘆遣瀬無く。なかにも憐れ、いや深きは、健治が姉にて、わが従妹なる美津子が心根にぞありける。常さへ涙脆き性なるに、世に比なき愛しの弟の、夢のやうに逝りて、幻に、まざ／＼しき其おもかげ、強て忘れむとすれば、姉様と呼ぶ聲音の耳に聞ゆるやうおぼえて、心を慰めんとする語草にも、何時しか、生前の事のみ語出られ、果ては又涙そぼふる朝な夕な、兎角に心地勝れずとて、これより兩月三月が程は、半ば床の上の起臥懶く、一時は、日に日に、頬の色悪うなりて、常さへ、細き四肢、いとゞ瘦細りければ、叔父母の心配は譬へむにもの無りき。去る程に、青葉がくれの時鳥、啼く音きこゆる頃比には、折ふし、思ひかへすところやありけむ。又藥の効能にやありけむ。氣も漸々冴え渡りて、血色も、いたく健やかになりぬ。斯くてあらむよりはとて、軈て六月の初旬、逗子の濱邊の濤の音に、心の憂を洗はしめんとて、醫師の言葉と叔父母の奬めのまに／＼、美津子は、氣に入りの腰元初を連れ、新橋指して抱への虎が威勢よく挽出す車にて出發したり。われも、其日は前の日より泊がけに來居て門に送り出しつゝ、學校の夏期休課となるはこの月の末よりなれば、必ず後より行くべし、俟ち給へと契るに、美津子は必ず來ませと笑み傾けて別れぬ。其時の樣の常にもあらで、心地よげなりしとて叔父母の喜ぶも親味の情、それにも增して、何とやらむ、心安らけく、喜ばしきはわれなるべし。

＊　＊　＊　＊　＊

一と月は夢の間に過ぎて、早や七月の初旬となりぬ。二旬の試業に苦みたるわれは、夏期休業の初の日に、逸早くも塵の都を去りて、逗子の濱邊の人となりぬ。碧き水、白き帆影、霞のやうなる遠山、あるは壯に、あるは幽なる濤の音を枕に、浮世の外の夢に入りて、宛然活きたる書卷のうちの仙となりたらむごときわが樂さは、如何ばかりなりけむ。去れど、そを餘所にして、わが樂さは他にありと、人知るや、奈何に。叔母は先きの日より、美津子と倶に此處にありけるが、わが來りし數日の前、已みがたき用事ありて、東京に歸りぬ。わが濱邊日記の第一の朝、わが最愛の人は、初と共に未だ隣室に圓なる夢を結びてありける曉がた。われは勇みて、衾を臥床を抜け、戸一枚繰明け、洗足のまゝ眞珠のやうなる白砂を踏みて、裏手の濱邊に出でぬ。海原は一面にまだほの黒し、岸にむせぶ濤聲に耳を洗ふて、西の方へと步を移せば、今は豆相の山山、薄き紅色を彩りたらむやうなるが、見る〱うちに光を增して、その面影刻々變りゆきつ、數十分の後には、海ともいはず、山ともいはず、紫の色美しうなり勝りゆく頃しも、身は蜃氣樓のやうなる山腰の洋人の館のほとりまで來り、これより徐に歸途に就きぬ。早や人影の一點二點三點、あるは波に遊び、あるは砂を踏めるなど見ゆ。宿屋の裏手に歸着くや、單衣を脱し、赤裸々となり、一跳り跳りて、われはザンブと潮のうちに飛び込みつ、しばしが程は波間を漾ひ游ぐに、清冽の氣骨に徹りて、心地えもいはれず。少時にして身を拭ひ、衣を纒ふて、柴籬廻り家に歸らむと步を移しけるに、端なくも、足下に奇しき乞食のやうなる童の延び上りざま、眞向ふの美津子が部屋を竊視くものあるに、われは訝しき奴よと、突如に鋭く、小僧ッと叱りたり。童は慄然として驚きつゝ、われを顧みぬ。年の頃は十五歲位にもや、脛あらはに、縞目も分かぬ襦袢一枚を着け、細帶にて洗足なり。顏の半面は燒痕にやあらむ、口ゆがみ横鬢禿て、片目は盲たるらし、半面は別人のやうなれど、これさへ汐風に黑みて穢し。下しおきたる蛤の籠肩にし、逃るが如く馳出しざま、われを斜に睨みたり、盲たる片目は、異樣の光を放ちぬ。

美津子が室は、早や開放ちて、清けく掃はれ、火鉢の埋火紅にして、藥罐の湯氣白く昇騰るさま心地清々し、膝坐きつゝ

急須に茶を點ずるは初なり。オヤ御早うございます、と笑みつゝ、恭しくわれに禮す。美津子は、今しも彼方の鏡臺に對ひ、化粧してありけるが、われを顧み、手ばやく終へて、座に着き、儀式ばかりの挨拶し、さていふ、母様は、直ぐ兄樣と、御一所にお出でなさるゝ筈なりしに、少し風邪の御様子との昨夜のお話。大した事では無いとのお言葉であつたれど、わたしは何も氣にかゝつて、今一度詳しい話をして下され、弱い奴と笑はずに、昨夜はほんに夢にまで見ました、母樣の御大病の報知の有つたところを、今思ひ出してさへ、胸が跳りますにと。堪へがたき胸の憂の色に出づる常からの苦勞性、何の心配する事があるものですか、前夜わたしが參上ッた時は、丁度砂糖湯を召上つて居られました。博士の佐藤よりも、甘い砂糖で直ぐ癒るほどの御大病、明日はお前と、一所にゆくつもりなりしが、氣分の外に、用事の少し出來たれば、二三日遲るべし、私の留守にまたお菓子の食過せぬやうに氣を附けて呉れとのお頼みがありましたぞえと、笑へば、あれ、また、あんな御冗談ばかりと。美津子も、笑ふて、心のやう〳〵落居しさまなり。



今しがた、御坐敷へ參つて見ますれば、もぬけの殼の兄様は、何處へお出であそばしたやらと、喫驚いたしました位。去りとては、逗子の景色は、美しく難有いではござんせぬか、朝寢坊さんが、こんなに早く起きて、オヤ、ホホホホ御免あそばせ。朝寢坊とは、誰が事を、僕は誰かのやうに、十時頃に起されて、未だ早いとふくれ、漸う十一時となつて、宛然眞暗から牛を引き出すやうに遲々と起きて出て、顔を洗へば、直ぐにドーンの年中二食上人とはお門が違ひますよ。お氣の毒樣やと兄弟にも勝りて親しき幼き時よりの間柄とて、何事も隔なき戯言、笑ひくづほれて、何時に無き、賑やかなる光景、朝餐持て來し婢女の赤ら顔さへかゞやきぬ。

美津子の血色は、いとゞあざやかになりぬ。なほ頬に痩せの見ゆれど、こは今にはじめぬことなり。眼の朝に冴えて、唇一點の紅深うなり、折々漏す微笑は、何時もの寂しきさまのみにはあらで、衰弱のやう〳〵癒えたらんとおぼしきふし〳〵、われは心の中に、いたく美津子とわれとの幸運を喜びぬ。膳に對ふて、われは健啖をほこり、牛肉の鑵詰一個を半以上たひらげ、兩人を驚せなどして打興じ、あなたもも



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

う、大丈夫だ、大盛五杯、富士の山のやうな奴を喰ふやうになつてはと、笑へば、美津子は底に可笑さを藏くしたらむやうの眉根打顰めて、兄樣それは誰の事でござんす。誰の事もあるものか、美津さんの事です。オヤ、いやな、兄さんが、あんな虛言ばつかり。いつ虛言をつきました、私はこの年になれど、まだ虛言と坊主の頭をいつた事は無い、これには立派な證人もありますよ、と、今しも婢女に手傳ふて、膳かたづけて、室に歸り來りし初を顧みて、ねヱ初、さうだらうと云へば、初は先きの話の事とや呑込みけむ、さうでござんすとも、と、眞顏に答ふ。それ御覽なさい。あれ、いやな初だよと、何の事やら解らぬ初が怪訝な顏つき、これも笑の種となりぬ。冗談は、それとして、兄樣妙な事がござんすよ。ねヱ初やといふに、初はうけつぎて、さうでござんす、もう何時も來る時分でございますのに、今日は何うした事やらといふ。美津子は、明眸を凝しつゝ感にえ堪へぬ時は、いつもすなる風情もて、また健治の事をか、未練なと、お叱りもござんしやうが、不思議といへば不思議、緣といへば奇緣、此濱邊に健治其儘の兒がござんす、不圖した事で、毎日遊びにまゐりましたは昨歳の暮さやう、親は無くとも子はそだつ、近所の人の情のめぐみに生ひ立ちて、今は早や[illegible]



ゐりますが、それは〳〵横顏の似たとは愚か、ほんに其まゝの愛らしさ、此兒を見るにつけ、敢果なや、彼の世の人となりし弟戀しく、遂にはもう斷念たといひながら、苦勞性の私、思ふに甲斐は無きものをと、幾度か心で心を叱つても、忘るひまなきは可愛の健治が事、私は何故斯んなに、弟が戀しいのでござんしやう、保養が却つて毒となつてはと、初にも心配かけましたが、これが、また思はぬ徒然の慰となり、今では其無邪氣の物語に、心の雲霧晴れて面白く、可愛く、此兒無くては、一と月二月、只斯うして逗子に居られるものではござんせぬ、可愛い、それは〳〵、兄樣に見せましたいやうな、と、言葉のふし〳〵には感溢れたり。それは羨ましい事かな、平常から敵役の私は、尙更に羨しいと、哄笑へば、冗談ではござんせぬと、美津子は極めて眞面目なりき。何時も威勢よき初は、更に語りつゞけぬ。その兒といふは、貴郎それは〳〵可憐さうな身の上、田越の漁士の孤子で龜と申ますが、產後のひだち惡くて母には死なれ、やう〳〵三歳のもの心つく頃よりは繼母の惡しみ折檻、羹湯を浴せられたとやらで、片顏に生れもつかぬ一面の火傷、程なく父にも先[illegible]可愛さ、ひがみが出たのでござんすもの、[illegible]

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

だゝれ、繼母には捨てられ、天にも地にもたつた一人となりましたは八歳の時とやら、親は無くとも子はそだつ、近所の人の情のめぐみに生ひ立ちて、今は早や十六歳といへど丈ひくゝ打見は十歳といふてもまことゝ思はれます位、蛤賣つて居りますが、世には神佛も無いことやら、生れて今が今まで涙の海をたゞよふ身の上に、何の因果か、人並ならぬ愚な生れ、隨分人の厄介ものでござんすれど、それでも人の温和しくさへすれば、云ふことそむかぬ從順さに、片目の馬鹿といはれて、其處此處のおあまり衣古しを貰ひ、蛤賣つてはいくらかづゝの資を得て、日を送つて居りますとやら、さりとは不思議に、その面容の健樣にお似申してか、お孃樣の健樣見るやうなと仰つて、お可愛がり遊せば、愚ながらに情は厚く、孃樣々々と、毎日朝夕に、一とたびは屹度まゐつて、まとまりも附かぬお話して、お孃樣をお慰め申し、來る度毎に、子安貝など綺麗な貝を拾ふて持て來ては差上げます、あれ彼處にあるのが皆それでございます。と指すを見れば、床の間の 紫縮緬の袱紗の上には、形も色も、さま〴〵なる小貝の山をなしぬ。

愚なりとはいへど、人の無情と、世の不幸とに生育ちし身の、可愛や、ひがみが出たのでござんすもの、夫れと打見たところは、普通ならぬ氣色もござんすなれど、なか〳〵に話の筋道も解り、人の情には、人一倍も、二倍も、深う感じます、何の因果で、と、いひさして、早や睫毛に露しげし。

片目の盲たりといひ、片頰の燒痕といひ、扨ては先きの奇しき童にはあらぬか。多感なる性のまた病にや觸らむに、話をつゞかせむは要なしと。もの珍しき今朝、寢坊先生の大奮發、附燒刄ははげ易いとやら笑はれても、今は詮無し、どりや、私はこれから晝前の宰予を學びます、初や圓朝洗足といふ、あはれな龜が身の上話に、涙流させた受賃として、忘れずに十一時には起して呉れ、と言ひ捨てゝ、その儘隣れるわが定の室にかへりぬ。

午睡の夢は、今しも破れむとして、まだ有耶無耶の境にあり。うつゝとも無く、聞ゆるは美津子の、いつもの朗かに清みて、情にも堪へざるごとき聲音なり。今日は何故に遲かりし、此間遣りし單衣を何故に着ては來ざりしぞといふ。

舌の運轉鈍き聲は答ふ、それでも大切の衣を汚してはならぬ



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

稲荷森のお熊婆の處へ預けて來たものを。汚してはならぬから預けて來たとは、何たる賢い事をいふ兒で、かほどの者を、世には何故愚かなりとばかりいふにやあらむ、と、早や聲もうるみがちなるを、朧げに聞き居たるまゝわが夢はやう〳〵全く破れぬ。

（未完）

## 哀別離苦の圖　（口繪説明）

口繪に掲げたるものは、獨乙國ニーデルヴアルト（Niederwald）にある國立普佛戰爭紀念碑面隱起彫刻の一部分を示したるものなり。此彫刻はヨハチス、シルリング氏(Prof. Johannes Schilling.）に成り、哀別離苦（Der Abschied.）の悲景を現すものなり。かの普佛戰爭や、哲學者フエヒテすら講壇を棄てゝ、劍を執りて修羅の巷に馳せしばかりにて、國内健兒の血湧き、腕は鳴り、今は志士國難に殉するの秋ぞよと、いざさらば劍に杖いて起たんとすれば、或は老親の堂に在るあり、或は鴛鴦夢未だ温かならざるの新婦あり、或は飽くにあかれぬ妻子あり。義の爲なり、羈絆皆絶つべしと、兼て覺悟せるものゝ、此時哀別離苦の情何ぞ禁ずべけんや。而も其哀情の凝成する處、彊敵を斃して、國威四海に震ふ。されば彼大事蹟を紀念するに此悲況の圖を以てするもの、蓋しまた頗る所以ありといふべく、而も後昆之を見ば、誰か義奮を發せざらんや。



## 兒籃

### ぶしやう者

まづさる處に、これはまた珍らしい、かやうな不精者が、またと二人あらうかといふ程の不精者があつた。母親が或夜の夢に引臼が懐に入ると見て、そして産み落したものでもあらう。この男について色々な可笑しい話があるが、扨て或時家で握飯の辨當をこしらへて貰つて、腰にくゝりつけてもらつて、草履をはかせて貰つて、さあ使に往けといひつけられて手を引かれて門口を出されて、表の方へ、さあ御出でなさいとつきやられたから、詮方なしに、爪先の向いた方へ、ブラ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ブラと、丸で當途もないやうに、歩いて行つた。やがて午過にもなつて、腹はへつたが、どうしても、腰の握飯を出して食ふ氣にならぬ、誰か來て、これを口へ入れて呉れぬかしらんと思ひ〳〵、飢腹をかゝへて歩いて居ると、やがて、向ふから、編笠をかぶつた一人の男が、アングリと口を開けたままで、此方にやつて來る。これを見て、あの奴は、腹が減つたから、あんなに口を開けて居るのだ、こいつ一番相談ものぢや、オイ〳〵貴公は腹が減つてるやうだが、なんと物も相談ぢやが、わしの腰にくゝり付けてある握飯を出して、わしの口に入れては呉れまいか、わしはとうから腹が減つてならんが、どうも出して食ふのが大儀でならんのぢや、貴公にも食はすから、どうだと顎で腰の方を敎へると、其男は、トロンとした目で、しまりのない聲で、おれに言つて居るのか、おりや否だ、おれも最前から、笠の緒がゆるんだから、誰か來て〆めて呉れんかと思つて、顎を張つて辛抱して居るのだといつた。さても〳〵揃つた不精者が、珍らしい事に二人まで落合した。

この男は、働いて食ふでもなければ、たゞ人の慈悲で生きて居たのである。然るに、或年、大飢饉があつて、誰も飯を呉れるものがない。働くのはいやなり、いつそこりや死んだがましだが、さりとて切腹は痛たし、身投は水が恐し、死んでも生命のあるやうに、だれか甘い工合に、生きながら葬式をして呉れぬかと思つて、心やすい人に相談すると、そりや可哀想だが、働くのがいやでは、この年廻りの悪いのに、村での厄介だ。それぢや旦那寺の棺桶を借りて來て、埋めてやらうといふとになつて、不精者は、いよ〳〵生きながら葬式されるとになつて、棺を擔がれて墓場に行く途で、隣村の金持で慈悲深い人が通りかゝつて、この譯を聞いて、それぢや可哀想な事だが、なんと棺の中の男、どうぢや、働くのは否か、否ぢや、それぢや、わしが一斗だけ米をやるから、それを食つて仕舞ふまでに、心を入れかへて見い。棺の中から聲を出してその米は白米か、玄米か。玄米ぢや、そりや面倒だ、早く棺をやれ。

梅も見よ櫻もならべさばかりに　　長流
まづちりそむる春のあわ雪

## 時　文

◎南　征　史　陸軍步兵中尉堀江八郞著　春陽堂版

此書は混成枝隊の始めて纜を宇品港に解いてより澎湖島を掠して、支那南方の力を壓しなる其間の事實をば、當時の從軍者堀江中尉の編述したるものなれば、從軍記者などの戰史を記するものとは異なりて、自ら正確なるを信ずるを足る。南征の原因戰域の地理、兩軍の兵力計畫及戰鬪、給養及衞生、戰鬪後の景況、臺灣へ轉軍及凱旋等、其記事を詳にし、又澎湖島の植移育殖に就ての研究を附錄させる、又挿むに數面の地圖を以てせり。蓋し日淸戰爭史上の、其好なる一區分戰史なりといふべし。

◎は　じ　句　紅葉山人作　同

收むる處は、いづれも新小說等に見えたる銀、アンチソエプリン等にて、而もまた讀賣新聞の三面記事にてはなきやと思はるゝものさへあり。アンチフエプリンの如きは、矢張書きくさしたる儘にて在り。これはこれ詮ずるに、山人のかきくさし反古を集めたるものとも見るべし。文士の自重に欠くるやなきかを疑ふ。

### 女學文壇雜俎　（本號〆切まで）

◎女工敎育（三輪田眞佐子）　女鑑第百四十九號
◎尋常師範學校女子部の增設を望む（斗南）　同　第百五十號
◎庭訓者としての母親（坪內逍遙）　花の園生第八年第三號
◎犯罪と家庭（原胤昭）　大日本婦人敎育會雜誌第百號
◎婦人の心得（坂谷芳郞）　同
◎泰西家庭敎育（白井いく）　太陽第四卷第三號
◎本邦上古男女の風俗（小杉榲邨）　同
◎嗚、高等女學校　土陽新聞一月二十九日

うめが香やここに月夜のおもしろし　千　代

## 片　々

◎文部省　女子敎育を奬勵するの所以を知るとあり。大阪朝日新聞同省當局者の談として傳へたるものゝ中に曰く、玆に宗敎々育に就き最も注意すべきは、女子敎育の一事なり。近來都市に於て、高等女學校を設立するもの、耶蘇宣敎師に多きを見る、女子敎育の務を宗敎家の盡力に任するは、邦人よりは寧ろ爲得策に非ず、外人の內地に雜居せざるに先ち、女子敎育を奬勵するは焦眉の一急務なりと。蓋し菊地次官の語る處といふ。

◎全國高等女學校　文部省第二十九年度年報により、同年末現在、全國高等女學校處在地及其數は左の如し。

| | 官公立 | 私立 |
|---|---|---|
| 文部 | 一 | — |
| 東京 | 一 | — |
| 栃木 | 一 | — |
| 靜岡 | — | 一 |
| 長野 | 一 | — |
| 京都 | 一 | — |
| 鳥取 | — | 一 |
| 山口 | — | 一 |
| 高知 | 一 | — |
| 大阪 | 一 | — |
| 奈良 | 一 | — |
| 愛知 | 一 | — |
| 滋賀 | 一 | 一 |
| 福井 | 一 | — |
| 和歌山 | 一 | — |
| 廣島 | — | 一 |
| 香川 | — | 一 |
| 宮崎 | 一 | — |

總計　十九

其生徒數は總計四千百五十二人、各種敎員總數二百三十七人なり。而してまた明治二十五年以來の官公私立高等女學校現在比較を見るに左の如し。

| | 官立 | 公立 | 私立 | 計 | 生徒數 |
|---|---|---|---|---|---|
| 二十五年 | 一 | 七 | 一九 | 二七 | 二八〇三 |
| 二十六年 | 一 | 七 | 二〇 | 二八 | 三〇二〇 |
| 二十七年 | 一 | 七 | 六 | 一四 | 二三一四 |
| 二十八年 | 一 | 八 | 六 | 一五 | 二八九七 |
| 二十九年 | 一 | 一二 | 六 | 一九 | 四五五二 |

之によりて見れば、二十七年に於て私立に於て頓に校數を減少し、また官公私立を通覽して、高等女學校生徒數を減少したるは、即ち、當時女學不振の影響せし處なりとす。廿九年度に於て高等女學校は公立にて四校を增加したり、而して、三十年度に於ては更に新校を增加したれば、今時現在の同校數は全國二十三四なりと知るべし。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎廿九年中　全國官公私立高等女學校初年級に入學を志願したるもの總計千九百八十人、中入學を許可せしもの計千九百十人なりとぞ。之より推せば三十年度は更に多數の入學者ありしなるべく、今年四月の募集には更に多數の志願者を見るなるべし。

◎横濱と高等女學校　横濱貿易新聞は、人もし横濱は東京を距ること遠からざれば、高等女子教育は東京に於て得さしむべしといはゞ、かれ我縣に於けるの女子教育の任を他府縣に依賴するものにして、地方行政の主趣に背くものなり、宜しく一高等女學校を設置せずんばあらずとの意を論じたり。

○尋常師範學校女子部　廿九年現在全國師範學校女子部の數二十一即ち新潟千葉栃木山梨長野宮城福岡秋田京都大阪石川富山和歌山島根德島香川高知長崎福岡佐賀鹿兒島の諸縣は之を有して、他の二十六縣は之を有せず。同年末現在同部生徒總數七百十九人なり。

◎台灣女子教育　昨年五月八芝林第一附屬學校に土人女子教育部を分設せしが、昨年末現在生徒數三十九名外に假編入二十二名なり。其三十九名に就きて年齡を取調べたるものを見るに、十年以下七人、十五年以下十四人二十年以下八人、二十五年以下五人三十年以下五人平均年齡十五年七分此内結婚者十四名、許嫁者十六名あり。學級は十五年以下を甲組とし以下を乙組となし、一週間教授時數各三十時間、教科課程の假規則は、修身（人道實踐の方法及日常の作法）國語（假字の讀方及簡易なる日常會話）習字（假字及日用文字）裁縫（運針、縫衣、色裡手巾、綉鞋類、衣服及裁縫辨仔類、鋪蓋肸帶の類、綿衣服烟袋類、網衣服之類、大綢料の類）編物（小兒靴下、腕はめ、帽子、涎掛類、靴下類、花瓶敷類、袋物、手袋、しやつ類）造花（梅、桃、菊、たんぽゝ、きりしま、罌粟、躑躅、海棠、げんげ、椿、茶、菜花、朝顏、百合、蘭、水仙、大菊、ばら、柳、牡丹、あやめ、松、竹、蓮、桐、石榴 其他四季花寫生）なりといふ。

◎高知縣　高等女學校圖畫科囑托教員伊與本某醜行あり、物論爲に囂々、遂に解職せられ、校長また引責退職するに至るべしといふ。これにつき土陽新聞は、一月二十九日紙上に「噫、高等女學校」と題し　校の失態を責め、校長其人を得ざるを難じ、今や高等女學校は無上の臭名を負ひ、殆ど其信用を失落せり、夫れ女學校の不信用は女子教育を衰替せしむる所以、而して女子教育の衰替は本縣の進歩を阻得するや實に大なるものなり云々と論ぜり。

◎東京感化院統計　同院は十八年の設立以來今日迄の入院生は三百十五名右の內現在生五十五名にして、殘二百六十名は退院生にして、其內見込なくして退院若くは六ヶ月以下にて退院せしもの四十九名あり、改良出院者二百二十一名、右の內改良の效著るしき者百三十三人の內、何れも方向定りて官衙奉職の者十八人、實業に就きし者四十七人、學生となつて通學する者三十四人、洋行者二人、教員一人、新聞記者一人、業務未定の者三十人にて、改良の成績は百人に對する六十三人の割合なりと云ふ。

◎杤木縣　縣立高等女學校は此程、痛く女生徒の奢侈に流るゝを戒め、父兄にも注意したりと。

◎救荒食糧　新潟縣西蒲原郡地藏堂町の早川良藏といへるは。元能登の産、貧苦の間に人となり、自ら多年の實驗によりて救荒食糧數種を發明し、警察署、町役場にてこれを試食したるに、中等社會の補食ともなるべきものとぞ。其製法は左の如し。

△藁餅　藁をよく選りて水にて洗ひ、微塵に切りたるもの二升と、白大麥粉三升とを混交せしめ、熱湯にて揉み、湯氣にて蒸し、臼に入れて搗く時亦た熱湯を加へ、頻りに手返すれば、追々粘りを生じ餅と爲る。之に食鹽を以て味を付けて食ふ。

△松の皮餅　松の樹の生皮を去りて、背色の所より肉付までの皮を採りて細末に碎きしもの三百目に、白大麥粉三升を混交したるものを熱湯にて揉み、以下藁餅と同樣に製す。

△スマ餅　小麥のスマ（挽粉の滓）二升に、大麥粉一升を混交したるものを熱湯にて以下前同斷。

△豆腐滓餅　豆腐滓二升に、大麥粉一升を混交したるものを熱湯にて以下同斷

右の餅類は煮ても煎りても熔解することなく、且つ孰れも甘味を含みたれば中等人も喰ふべし。

△大麥の粥　一日白米三升を要すべき家にて此の粥を用ふれば、白大麥一升五合にて足るなり。其の製方は白大麥を精ぎ、直ちに釜に入れ、徐々火を焚き、水の減るに隨ひ少しづゝ數十度に水を加へ、蓋をせずして二時間餘煮るなり。此の粥米三升に代る。

△樺太雜炊　三升鍋に味噌と水を入れ、次に大根なり、干菜なりを入れ、下等の大麥粉（三番以下の粗品）三合を加へ、頻に攪廻して煮る、此れ通常人二人の一日食料となすべし。

△一夜造りの味噌　上州芋なり、甘藷なり、一貫目を湯氣にて蒸し、食鹽四合を入れて、臼にて搗き味噌とす、中人も用ふべく、二十日間は腐敗の恐れなし。

△上等の粥　大麥一升に、支那米五合を混交して粥に煮る時は、上等社會にも用ふべし。

◎近時知名　の士にして、女子教育論をなすものやうやく多し、之よりして其盛んなるを致さんと往年の如からんとするの兆あり。而して其說の調子、往年とは異なり、いづれも、保守的、漸進的にして、學問は少くとも、德に充てるがよしとはいふなり。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 時報

## ◎英照皇太后御遷靈式

二月二日　英照皇太后陛下の御靈には、靑山御所なる皇靈殿より宮中皇靈殿へ御遷坐あらせられたるを以て、當日、天皇　皇后兩陛下には、賢所皇靈殿に御出、御參拜あらせられしさぞ。

◎女子高等師範學校生徒募集　前號にも報し置きたるが、同校には、來る四月、新規則に從つて、文科理科生徒各五人の入學を許可するよしにて、其規則を左の如く發表せり。

本年四月當校に於て（文科、理科）撰科生各五人入學を許す、志願者は同三月十五日までに當校に願出づべし。

但入學試驗は同月三十一日より施行す、其科目は左の如し、尙詳細は當校に就き承合すべし。

一入學試驗科目　體格　國語（解釋文法／作文）　漢文解釋　歷史（本邦／外國）　地理（本邦／外國）
數學（算術、幾何初步）　理科（博物化學／物理）　家事（衣食住／裁縫）

一志願者資格　尋常師範學校女子部、修業年限六箇年の官公立高等女學校卒業生及之さ同等の學力を有する者にして身躰健全品行方正年齡十七年以上二十五年以下の者

但學力の試驗を須ひざる者の年齡は此の限にあらず

一左記第一より第四に至る四項の一に該當する者には學力試驗を須ひず第五項に該當する者には撰修せんさする學科の外學力試驗を須ひず

一元東京女子師範學校及元東京師範學校女子部卒業生

二本校本科、專修科、撰科、元小學師範學科及高等師範學校元女子部卒業生

三本校本科二個年以上の理科を履修せるものにして其履修せる學科の一部を修めんさする者

四本校附屬高等女學校補修科優等卒業生にして其補修したる學科を修めんさする者

五尋常師範學校女子部、修業年限六箇年若くは同程度以上官公高等女學校卒業生にして當該學校長より品行方正學力優等の保證ある者

◎新潟裁縫學校設置　今回同市古町通六番町に新潟裁縫學校を設け、二月一日より開校せしよし。同校の目的は裁縫を專修せしめ併て家政學を教授する由。

◎富家の少女自ら學資を給す　土佐國安藝郡田野小學校高等第三年學生筒井利枝子は、一家富饒なるにも拘らず、自ら毛糸細工をなして金を獲て、月謝書籍筆墨の料に供し、父母の助けを假らずさいふ。

◎篤學の女子　宮崎縣東臼杵郡垣富村伊藤喜藤太の長女キサは、家富めるに非ざれば、たゞ家事の暇に讀書に心がけしも捗々しからぬ事のみなりしかば、昨年齡既に十九歲　遂に意を決して同地延岡高等小學校一學年に入學したりさいふ。

◎子孫百二十七人　世には珍らしき子福長者あるかな、秋田縣平鹿郡八澤木村八澤木子瀧之澤菊池久左衛門の母みつさ云ふは今年八十才の高齡にて六男五女を生みしが內男二人死亡して殘るは九名なり、男は嫁を迎へ女は他に嫁ぎ、今一月の調べにて其子孫百二十七人の多きに及ふさぞ。今其統計を聞くに、

| | | |
|---|---|---|
| 長男の子 | 男一人女八人 | 孫七人 |
| 次男の子 | 男四人女一人 | 孫八人 |
| 三男の子 | 男六人女二人 | 孫六人 |
| 四男の子 | 男二人女三八 | 孫八人 |
| 五男の子 | 男一人 | 孫五人 |
| 長女の子 | 男三人女三人 | 孫六人 |
| 次女の子 | 男五人女五人 | 孫十人 |
| 三女の子 | 男三人女二人 | |
| 六男の子 | 男六人女二人 | |
| 四女の子 | 男二人女四人 | |
| 五女の子 | 男四人女一人 | |

◎貞女　宮城縣柳田巳代治妻トラ嫁娶以來廿一年癈疾の姑に事へ遊蕩の夫を諫て家業を勵み貧苦の間に幼兒を撫育し孝貞比なくよつて其筋より賞金五圓を下賜せり。

◎孝子　山形縣置賜郡屋代村武田某長男淸三郎、幼齡の身を以て、父母に孝養怠りなく、家貧困なるが爲、每夜繩を綯ひて修業の資さなし、猶幼弟の學資をも給し、其行奇特なるを以て、其筋より賞金二圓を下賜されたり。

◎同　阿波國阿波郡市香村北岡龜五郎は、幼にして母を喪ひ、爾來頑父に事へて孝養盡すと二十九年一日の如し。依て同縣知事は之を賞するに金五圓を以てせり

◎同　阿波國板野郡鳴門村福田長太郎は、多年祖母に事して孝養一方ならざるを以て、同縣知事之を賞するに、金一圓五十錢を以てせり。

◎同　島根縣仁多郡横田村石原藤市は夫妻共に、十有余年祖父母に事へて孝養を盡したるの廉を以て、同縣知事は之を賞して金三圓五十錢を下賜せり。

◎忠僕　京都下京區松原通り大和大路東入醫油商伊東喜三郎方雇人木村定次郎（三十三年）は、其主に仕へて忠勤すると二十年、府廳之を賞して木杯一個を下賜す

◎少女の渡米　山梨縣東山梨郡平等村荻原眞の養女さだ「九年十一ヶ月」は、數年前渡米し、目下歸朝中なる東八代郡相興村竹下氏某に伴はれ、英學研究の目的を以て、米國桑港へ渡航の儀を出願したるに、二月八日許可の上旅行免狀を下付されたり。

◎女子新聞　佛國巴里に於ては過般ラ、フロンドさ稱する月刊新聞發行せられ、一人も男子を使用せず、即ち主筆記者を初さし、各部擔任の記者、通信員、事務員、職工及小僧皆女子なりさ云ふ。又該新聞社は有名なるフィガロー社の如く、壯麗なる建築物を專用し居れりさ云ふ。



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

# 明治女學校義捐金募集告白

明治女學校は、今を距る十又四年前、島田三郎、田口卯吉、木村熊二、巖本善治等が、發起創立せしものなり。時に、民間未だ私設獨行の女學校あるなく、但だ外國傳道會社の管理に係るものありしのみ。同志切りに之を遺憾とし、深く國躰に基づき、兼て日進文化の學術に適應せる、私立の女學校あらんことを熱望し、大隈伯、澁澤榮一君、其他、朝野諸名士の協贊を得て、創建せり。爾來、十四年、孜々、育英に盡力し、前後、入門生、一千五百名に超ゆ。此を以て、精神次第に貫徹し、校友四方に起り、將に擴張の機を決して天下に請ふ所あらんとする時、圖らざりき、去々年二月、隣家火を失し、校舍悉皆類燒に罹り、十年の苦心、一朝烏有に歸せり。

於此乎、天下同情の士、呼ばずして應じ、奮つて義捐寄捨せらるるもの、太はだ多し。就中、紡績會社數百の工女、相約して、其賃金の貯蓄を寄附せらるるあり。有志婦人、四方に訴へて、一大慈善市を開かるるあり。甚しきは、結髮を廢して、其費を寄せらるるもの、若くは、食を斷つて、汗血の喜捨を寄せらるるものあり。感慨眞とに禁じがたし。如斯して、合計金六千圓を得、外に、勝海舟先生の武道道場、大隈伯の鐘樓、アリスミラー孃の外國教師館、ハドッフォルン孃發起紀念館、鈴木眞一氏の教場一室　文學音樂會の音樂教場一室、中川嘉兵衞氏の默想室、等の建築預約を得たり。此に於て、災後一周年を期とし、東京府下北豐島郡巣鴨村に、校地五千六百坪、建家（二階造西洋館及日本家）一百二十坪を得たり。偏へに、是れ、天下仁人非常の慈惠による。今にして、吾校は、舊に劣らざるの隆盛を復するを得たる也。

因て熟ら思ふに、今の時は、則ち昔時に異る。各府縣高等女學校新たに起り、四方到る處に、女子の普通教育あり。形勢毫も十四年前の寂寥たるに似ず。蓋し、女子普通教育の器關は、畧ぼ具備せりと云ふべし。夫れ、明治女學校の初て起り、爾來天下仁俠の士の協贊を辱くせる所以のものは、自から特種の趣意あるべし。若し、四方普ねく供給し得る通常容易の盡力にして止まば、必らずや恐る、熱情同感の知己に孤負せん。故に、知る。今や更に一段の難を冒し、當に一歩進向の責務に任ずべき機會に立てりと。

之を以て、明治女學校第二期の教育方針として　今後將來に盡力すべきは、一に、有限若干名の女生に特種の普通教育を施すこと、二に、高等教育の課程を漸次に擴張し、他日女子大學の地位に到達せしめんこと、是れ也。其一、特種の普通教育とは、家庭及脩己の鍛練に重きを置くべき普通教育にして、生徒多數女學校に於て施こしがたきものなり。其二、高等教育は、十年前來既に施授したるものなれども　今後更に擴張し、彼の高等女學校卒業後の有志をして、遺憾なく學修せしむべき科程を具へんことを望むにあり。

夫れ此如き二箇の希望は、今の時に於て尚ほ稀有に屬す。只管らに、仁俠の士の贊助を仰ぐにあらざれば、遂行極めて難し。則ち廣く校友を募り、着々方針を進め、歩々堅實の基礎を置えて、敢て退轉せざるの進歩を了せんことを期す。茲に初て擴張の途に上らんことを決定し、先づ基本金三万圓の義捐を各地方の有志に請はんとする也。仰ぎ願くは　天下博愛義俠の仁士、仔細に吾校多年の精神を吟味せられ、幸に同情を寄せ、惠然として贊助の恩を施こし玉へと云ふ。

明治三十一年二月

東京明治女學校

校長　巖本善治

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

(四五九)

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY